

東北大学文学研究科 考古学陳列館所蔵大木冨貝塚出土基準資料 —— 山内清男編年基準資料 ——

早瀬亮介・菅野智則・須藤 隆

Type Artifacts of the Daigi Types of Jomon Pottery Excavated from the Daigi-gakoi Shell Midden by Dr. Sugao Yamanouchi

RYOSUKE HAYASE, TOMONORI KANNO and TAKASHI SUTO

Department of Archaeology, Faculty of Arts and Letters, Graduate School, Tohoku University

Contents

Introduction

1. Overview of the Daigi-gakoi Shell Midden
 2. Course of the Study for the Daigi Types of Jomon Pottery from the Daigi-gakoi Shell Midden
 3. Type Artifacts of the Daigi Types of Jomon Pottery collected in Tohoku University
 - (1) Overview of the Materials
 - (2) Type Artifacts of the Daigi 4 to 10 Type Pottery
 4. Character and Significance of the Materials
- #### Conclusion

Archaeological Museum of Tohoku University exhibits many valuable materials for the study of archaeology and ethnology from Paleolithic to Early Modern period collected in Japanese islands and the neighbor area. In these materials, there are a lot of archaeological materials collected by Dr. Sadakichi Kita and Dr. Nobuo Ito of faculty of law and arts, Dr. Kotondo Hasebe and Dr. Sugao Yamanouchi of faculty of medicine in Tohoku University. The Jomon pottery, taken up in this paper, is the materials excavated at the Daigi-gakoi shell midden by Dr. Sugao Ymanouchi. He deposited them in faculty of law and arts through Dr. Ito, who excavated the site with him.

The Daigi-gakoi shell midden is located at Shichigahama Town, Miyagi County, Miyagi Prefecture, on the coastal terrace shaped like tang extending to the Shiogama Bay. The site area spreads over 140 m from east to west by 250 m from south to north. Shell strata are distributed from edge of plateau to slope. Dr. Yamanouchi excavated Location A, B, C, D, E, F, and F' with Dr. Ito in 1927 to 1929.

Dr. Yamanouchi advocated the Daigi types based on the materials of these excavations. He classified the Daigi types to 10 types, and subdivided in a and b on Daigi 2, 7, and 8 type. He examined stratigraphic relationship in the site, and parallel pottery types in other area, then he placed the Daigi 1 to 6 types on Early Jomon, and the Daigi 7a to 10 types on Middle Jomon period. In present time, the Daigi types are studied as pottery types from early stage of Early Jomon to last stage of Middle Jomon period in central and southern area of Tohoku District on the basis of the study by him.

He selected pottery of the each Daigi type from the site, and took 24 photographs of them. These photographs have been paid attention as the clue to understand the Daigi types. But nobody have actually observed and investigated these potteries until now. In this paper, we reported these type artifacts of the Daigi types. We presented photographs, scale drawings, and rubbings of 75 materials belonging to the Daigi 4 to 10 type, and observed and described pottery attributes, for example forms, shapes of parts, techniques and designs of decorations, in attribute lists. The materials were well preserved, so we could

observe techniques and processes of shape formation, decoration, and surface finishing in pottery making.

The result of these examinations proved that Dr. Yamanouchi grasped the characters of each type in detail, and selected typical materials. In addition, it was noticeable that he selected pottery carried from other area. Furthermore, we investigated the letters written in back of pottery sherds, which showed locations and strata in the excavations. Remarkably, we confirmed that the evolution from the Daigi 8a to 10 type had been understood in the stratigraphic relationship at Location B by him.

Standing on these studies, we indicated 3 points about the research method of Dr. Sugao Yamanouchi, who established basis of Japanese prehistory. 1. His chronological and typological studies based on stratigraphic relationships. 2. He understood evolution of pottery types through examinations for hoards excavated from one site. 3. He noticed pottery carried from other area, and investigated chronology of pottery types in relation between each other areas from the wide field of vision. These materials show that he appropriately understood the Daigi types by these excellent method, so those will be considered as basic materials for the study of the Daigi types in future.

はじめに

東北大学文学研究科には石巻市沼津貝塚出土骨角器、土器、土版、動物形土製品、名取市経ノ塚古墳出土鎧形、家形埴輪、円筒埴輪などの国指定重要文化財をはじめとし、旧石器時代から近世まで、日本列島と周囲の地域の多様な考古資料、民族資料が収集、保管されている。

これらの文化財は、本学の考古学、歴史学研究を開発、発展させた喜田貞吉教授、伊東信雄名誉教授、芹沢長介名誉教授が中心となって調査・研究された学術資料、並びに資料価値の極めて高い学術資料が体系的に整理され、考古学、歴史学、民族学の重要基準資料として一貫して研究の発展に寄与しつづけたものである。また、東北大学の様々な学問分野が学際的研究を絶えずはぐみ続け、今日の揺るぎない学風を形成した証といえる。こうした貴重な学術資料のうちには、日本の縄文文化研究の基礎を確立し、研究を推進した法文学部の喜田貞吉・伊東信雄、医学部の長谷部言人・山内清男が関わった多数の研究資料があり、本学が活用すべき貴重な学術資料の一群である。

考古学研究室では、須藤の指導のもとにこうした重要資料の由来、内容を詳細に検討し、データベース化する作業を精力的に進めてきた(須藤 2003, 2005, Suto 2004)。2005年度には、日本の縄文時代研究史にとって重要な宮城県七ヶ浜町大木囲貝塚調査資料について、資料化、画像化、資料内容の詳細な調査・研究を行った。本学術資料は、1927年から山内が大木囲貝塚の数多くの地点で発掘した土器群であり、山内とともに調査に取り組んだ伊東信雄が基準資料として寄託をうけ、東北大学考古学陳列館に収蔵、保管されてきたものである。

この資料は、東北地方中部の北上川、雄物川流域、南部の阿武隈川・阿賀野川流域にかけて分布する縄文時代前期から中期の土器型式で、山内が標識とした大木4式から10式の一括土器群である。

今日、東北地方では多数の集落跡、貝塚が調査され、前期から中期の集落構造、墓制の変遷が理解できるようになって

きた。膨大な蓄積資料にもとづいて縄文時代の社会、文化の変動を解明していく上で、土器研究も従来にまして客観的な視点での実証研究が望まれている。この大木式土器群の型式内容、その変遷についても、現在、様々な重要な研究課題が提示され、様式の変化・変異についての議論も盛んである。

東北大学文学研究科考古学研究室に寄託、収蔵されていた本資料を研究し、その型式内容を明らかにし、公開することは、現在の埋蔵文化財の調査と実証的研究に寄与するところが極めて大きいと考える。

したがって、この研究論文では、大木囲貝塚の研究の経緯と山内清男の提示した大木式基準資料の意義、そしてその各型式の装飾意匠、手法、土器の製作技術、器形、器種構成に関する観察内容、検討結果を記すとともに、基礎資料として写真・拓本・属性観察表・関連主要文献を掲載した。

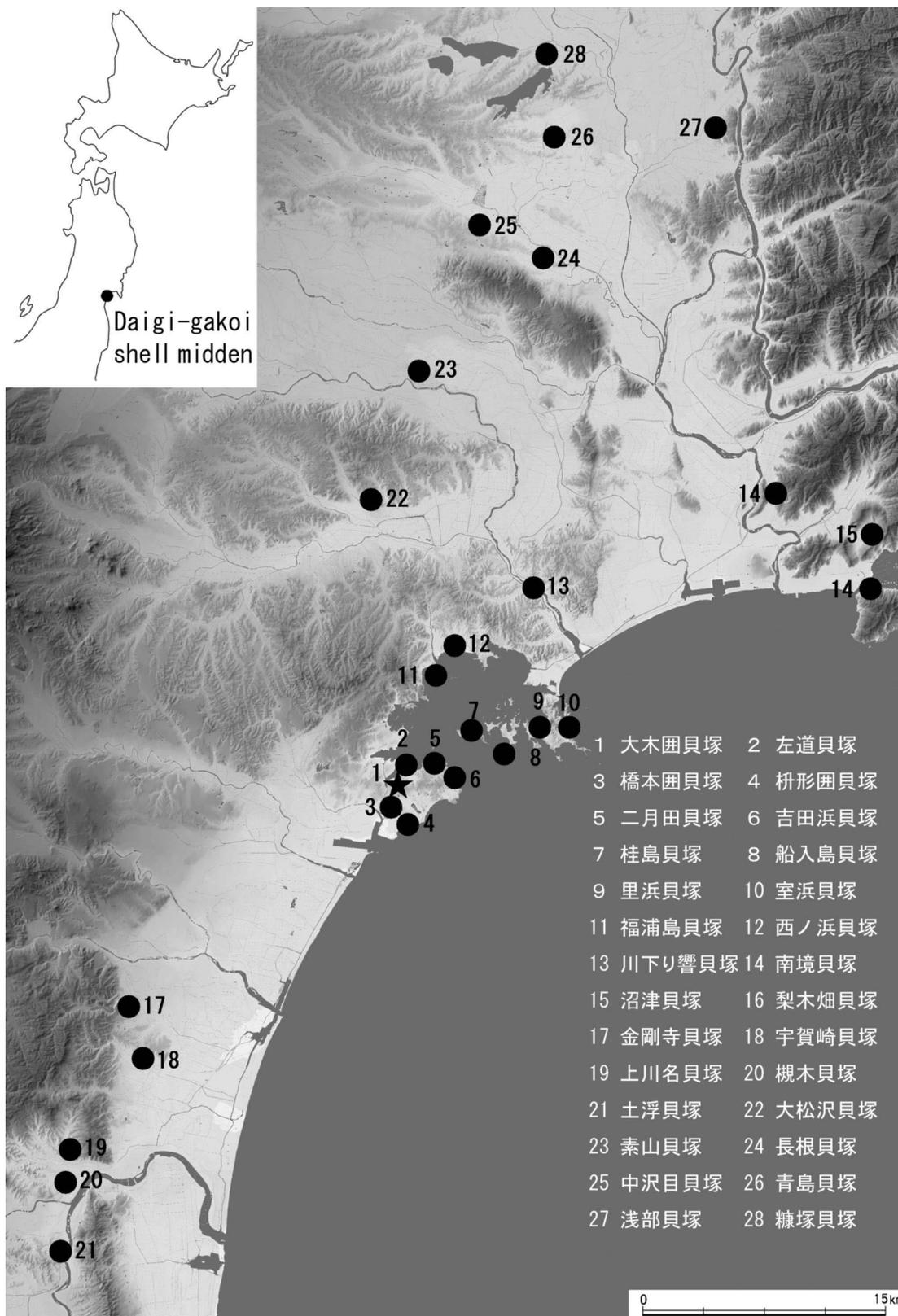
(須藤)

1. 大木囲貝塚の概要

大木囲貝塚は宮城県宮城郡七ヶ浜町東宮浜字東大木、西大木、北下方、南下方に所在し、塩釜湾に突き出す舌状海岸段丘に立地する(第1図)。貝層は台地縁辺から東・西・南斜面に広がり、北斜面では径10m弱から20m程の小貝層が群在する。そのひろがりは東西140m、南北250mに及ぶ。標高は28mから38mである(第2図)。

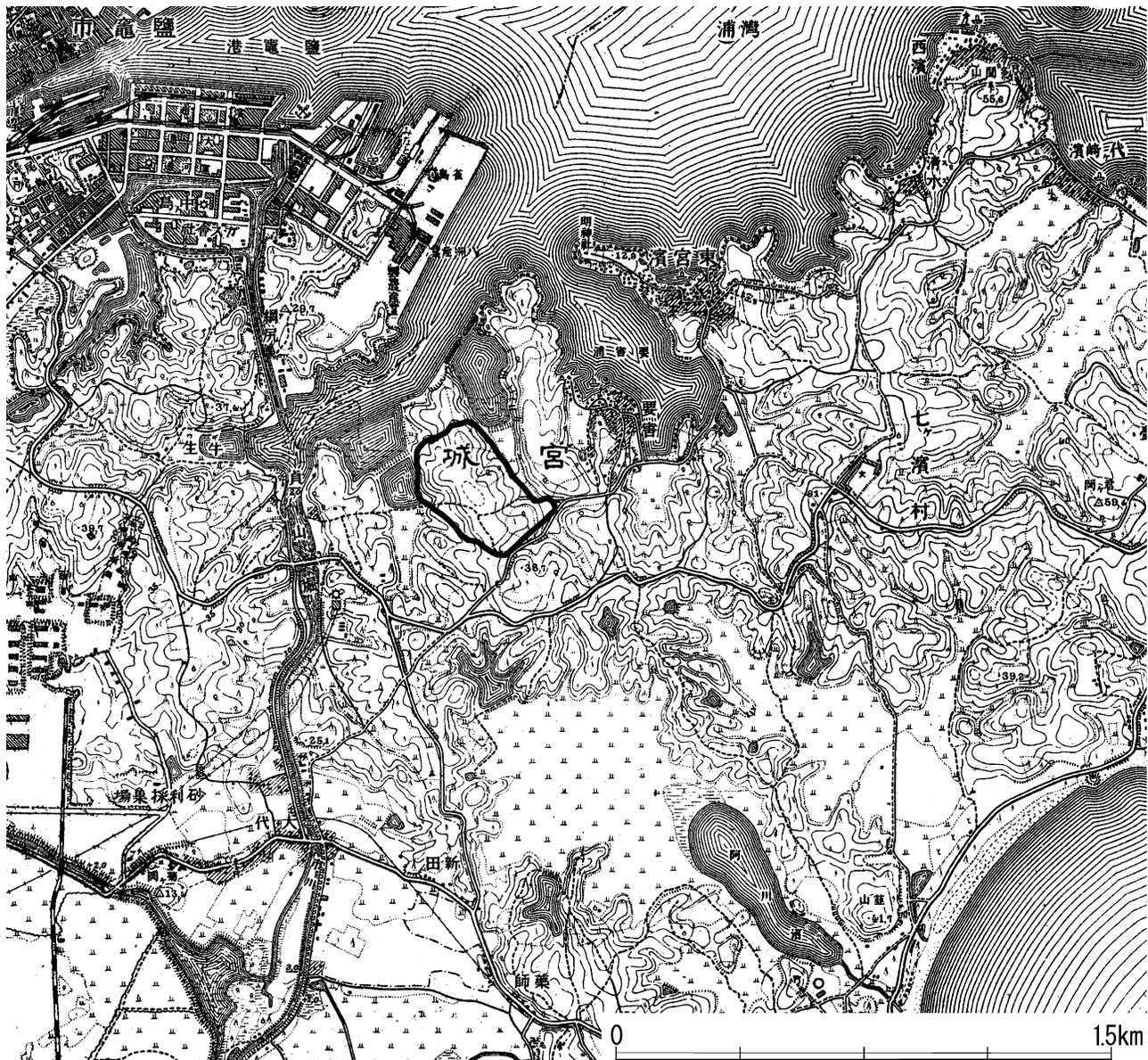
大木囲貝塚が文献上に確認できるのは1919年以降である(松本1919a~e、長谷部1919a、注1)。

大木囲貝塚の学術調査は、1917年の松本彦七郎による調査(松本前掲)を嚆矢とする。1918年には長谷部言人(長谷部前掲)、1925年に清野謙次(清野1925, 1969)による人類学的調査が進められた。1927年から1929年に山内清男(山内1929a)が考古学的調査に取り組み、本資料が提示されることになる。その後、1948, 1949年には鎌倉学園考古学部(原・馬目1968)、1949年に伊東信雄(福田1973, 八巻他1974)、1963, 1965年には東北大学教育学部歴史研究室の調査(小笠原1968)が行われている。1968年には国の史跡として指定告



第1図 東北地方中部主要貝塚分布図

Figure 1. Distribution of shell middens belonging to Jomon period in the eastern central area of Tohoku District



第2図 大木冨貝塚地形図

Figure 2. Topographical map of the Daigi-gakoi shell midden

示され、1972年から1978年には、七ヶ浜町教育委員会による環境整備を目的とした調査が進められた(福田1973, 八巻他1974, 1978, 1979, 1980)。しかし、このように調査件数は多いものの、調査について具体的研究成果が報告されることは少なかった。

本論文は主に、1972年から7年間、東北大学考古学研究室の指導によって七ヶ浜町が実施した調査の概報と伊東信雄の関連著作にもとづいて記述した。

山内の学術調査は7地点で行われたことを伊東信雄が述べ(八巻他1979)、A, B, C, D, E, Fの6地点名を挙げている(伊東1981)。今回調査した土器内面のラベルから、さらにF

地点の存在が明らかになった(注2)。本論では、これらの地点から出土した資料が山内によってどのように研究され、基準資料として提示されたかを検討した。

2. 大木冨貝塚出土大木式土器群研究の経緯

「大木式」という名称を初めて用いたのは、松本彦七郎と長谷部言人である。

松本(1919a~e)は彼の時期区分における第一期を大木式とした。1917年の大木冨貝塚調査資料をもとに設定したと考えられる。説明と提示された図から、山内の「大木8b式」ま

たは「大木9式」に相当すると推定される(注3)。その後松本はさらに検討を進め、多賀野式から大木式を経て青島式へ至る変遷を提唱した(松本1929, 1930a~c)。

長谷部(1919b)は大木罎貝塚出土土器に対して仮に大木式の名を与え、宮城県東松島市里浜貝塚の土器と対比して説明している。その内容から松本の大木式と類似し、中期後半の土器を指すとみられる。

山内は、伊東信雄とともに大木罎貝塚の層位的発掘を行い、その資料を検討し、前期から中期の縄文土器を大木1式から大木10式に編年した。さらに、大木2式, 7式, 8式をa, bに2分した。これらの土器型式は、東北地方南, 中部における前, 中期土器編年の基準であり、膨大な資料の蓄積によって様々な型式理解が関東, 東北地方の縄文研究者によって提示され、議論されている。

この基準資料を確保した後、山内は縄文土器編年体系の構築を進めた。「関東北に於ける繊維土器」(山内1929a)で、繊維土器が当時最古段階の土器群として関東・東北地方に広く分布することを明らかにした。大木罎貝塚の層位的発掘成果は、この研究の一翼を担うものであった。

この論文の中で山内は、1927年から1929年にかけて行った大木罎貝塚AからE地点の調査の概要、特に土器とその層位的出土状況について記述している。繊維土器には少なくとも2つの小別があるとし、「大木1」, 「大木2」として説明している。その内容から、後の大木1式, 2式に当たると考えられる。また繊維土器以後所謂厚手式(加曾利E式並行)以前の型式が少なくとも4型式知られるとし、現在の大木3式, 4式, 5式と考えられる土器について若干の説明を行っている。大木罎貝塚全体としては10余型式の存在を示唆した。しかし、大木1式から10式の各型式はなお十分に把握されていなかった(山内1929a)。

次いで「繊維土器について 追加第一」(1929b)では、宮城県東松島市川下り響貝塚の調査に関する記述で、「最下の黒色粘土層中から繊維の混入あるもの(大木1, 2), 及びその他の土器(仮に大木3, 4, 5, 6, 7, 8とする)が混出する。以上の層では大木9, 10即ち大木の一番新しい所に並行するものが主であるが、(後略)」と、初めて大木罎貝塚の土器を10区分し、その層位的関係に触れている。

また、この年に作成された山内清男の編年表には、大木1式から10式の型式名が記載され、さらに7式と8式の間に加曾利E1式並行型式の存在が書き込まれている(伊東1977)。伊東は、この編年表に槻木1, 2式があつて室浜式がないことから、宮城県柴田郡柴田町槻木貝塚2次発掘の1929年5月以後で、宮城県東松島市里浜貝塚を発掘した同年11月以前の研究段階の資料と推定している。

1936年に山内は、「日本考古学の秩序」の付表「縄文土器型式の年代的組織(假製)」において初めて大木2, 7, 8式にa, bの細別編年を示した。この時期に大木式土器の型式編年

が確立したと考えられる。さらに、早期・前期・中期・後期・晩期の5時期大別編年案が提示され、大木式は、前期前葉から中期末葉に位置づけられた(山内1936)。そして、ほぼ同じ内容の編年表「縄文土器型式の大別と細別」が1937年に公表された(山内1937)。

山内は大木式土器を設定し、その編年案を示したが、「斜行縄紋に関する二三の観察」(1930)、「日本先史土器の縄紋」(1961)、「日本原始美術」(1964)の図版解説などの中で断片的な説明が行われているにすぎず、型式の具体的内容について公表することはほとんどなかった。

大木式土器全体について体系的な説明を初めて行ったのは伊東信雄である(1957)。伊東は山内と協力して大木罎貝塚の発掘調査に取り組んだことから、その見解は山内の型式内容を具体的に示している(伊東1957)。

さらに興野義一は、大木罎貝塚や宮城県登米市糠塚貝塚などで調査あるいは採集した資料を用いて大木式土器の解説を行った。特に前期の土器型式に関しては、興野の入念な検討で明らかになった部分が多い(興野1967~1970, 1981, 1984)。本論では、伊東の「宮城県史」(1981)、興野の「画龍点睛」(1996)の記述にもとづいて山内基準資料の検討を進めた。

3. 東北大学所蔵大木式標識資料

(1) 資料の概要

山内清男が大木式土器の基準資料とした大木罎貝塚出土土器は、24枚の写真に114点の土器破片と復元土器が掲載されている(興野1996図版96~107)。東北大学文学研究科考古学陳列館と標本室には、この基準資料のうち、大木4式から大木10式までの土器78点が収蔵されていた。今回の調査・分析では、3組6破片が接合した。また、陳列館所蔵資料から写真掲載資料と接合する新資料が1点、掲載資料と同一個体と判断される破片1点を確認した。その結果、本稿で検討した資料は総計75個体分である。

標識資料には次のような墨書、朱書の書き込みがある。

①墨書 a: 「大木」、墨書 b: 「大木罎」、墨書 c: 「大木罎貝塚」。文字は細字で4~8mm、縦書きと横書きがある。主に土器破片の下半、中央に書き込まれる。aは42, bは2, cは14個体の土器に認められた。同一筆跡とみられる。

②朱書文字は「B2」, 「B3」, 「B6」, 「C8」など、アルファベットと数字で、2~4mmの細字、横書きに記される。土器片の右下隅にあり、同一筆跡で32破片ある。アルファベットが地点、数字が層位を表す。伊東の指摘のないF'地点の記載がある。

③「19」の黒スタンプ文字(資料35)。

④「山内清男氏寄託」のラベル(資料64, 65)

(2) 大木4式から10式土器の基準資料について

大木4式土器(第3図1~5, 写真図版1-1~5)

大木冨貝塚出土大木4式基準資料は総数5点である。器種は深鉢が主体で、鉢が伴う。深鉢は、口頸部がわずかに外彎する1類、口頸部が強く外彎する2類、体部が丸くふくらみ、口頸部が軽く外彎して立ち上がる3類に区分される。朱書きは3点に認められ、E地点5層(2点)、6層(1点)から出土した資料である。

資料1(「大木冨」の墨書)

わずかに場底となる底部から、体部にかけて緩やかに内彎して立ち上がり、口縁部に向かって軽く外傾する鉢形土器である。推定口径22.5cm、底径17.0cm、器高12.1cm(注4)。口縁には幅12~15mmの太いU字状の粘土帯が貼付され、2個1対の突起となる。貼付の後、口縁部から体部にかけてLR縄文が施される。そして幅3~5mmの細い粘土紐が横、縦の順に貼付され、格子状文となる。内面はなでの後、軽い磨きが行われる。器厚は8.5mmである。

資料2(「大木」の墨書, 「E5」の朱書)

頸部で緩やかにくびれ、口頸部が強く外彎してひろがる深鉢2類である。口縁部は無文で、頸部以下に縄文が施される。縄文原体は軸となる縄に附加条Lを巻きつけたものと判断した。頸部に角張った施文具による1条の連続山形文がめぐる(写真図版8-1)。内面はなで調整である。器厚9.5mm。

資料3(「E5」の朱書)

体部が比較的強くふくらみ、口頸部が緩やかに外彎する深鉢3類である。口縁端面に粘土紐が波状に貼付される。口縁部は無文で、頸部から体部にかけてLR縄文が横に回転される。縄文を施した後、3~6mmの細い粘土紐で波状文などが貼付される。粘土紐は器面に軽く貼付され、器面に押しつけた痕跡は認められない(写真図版8-2)。内面は、なでの後、軽く磨かれる。器厚は9mmである。

資料4(「大木」の墨書)

新たに同一個体破片を確認した。体部が軽くふくらみ、頸部から口縁部にかけてわずかに外彎する小型の深鉢1類である。口縁に細い粘土紐による渦巻文が貼付され、口縁部から体部にかけてLR縄文が施される。内面は横なでで、接合痕が明瞭に観察される。器厚は8mmである。

資料5(「E6」の朱書)

口縁部がわずかに外彎する深鉢1類で、文様構成は資料2と共通する。LR縄文を施した後、先の角張った施文具を用いて連続山形文が1条めぐらされる。沈線は深く、縁辺はほとんど調整されない。内面はなで。器厚は9mmである。

大木5式土器(第3図6~11, 写真図版1-6~11)

大木5式基準資料は総数6点である。器種はすべて深鉢で、体部から口縁部にかけて緩やかに外彎する1類と、強く外彎してひろがる2類、内彎する短い口縁部が立ち上がり、体

部上半が球形にふくらみ、筒形の体部下半に続く3類の3類型が認められる。

資料6(「大木」の墨書)

口縁部が肥厚し、軽く内彎する深鉢3類である。口径は推定25.0cm。装飾は、体部にLR縄文が横に回転され、さらに口縁部と肩部に2条1組の粘土紐貼付文が飾られる。粘土紐は幅2mmほどで、2条の間は沈線によって調整される。三角形、山形、杏仁形などの貼付文が横線や斜線によって連結され、複雑な意匠を構成する(写真図版8-3)。内面にはなでが施される。器厚は肥厚する口縁部で12.5mm、体部で8.5mmと変異が大きい。

資料7

深鉢2類である。口縁に粘土帯を貼付した後、口縁部から体部に縄文を施す。口縁の粘土帯に指頭押圧を加え、鋸歯状にする。所謂「鋸歯状装飾体」(興野1969)である。さらに角張った工具による沈線で連続山形文を3条めぐらせる。沈線の縁辺はほとんど調整されない。内面はなで。器厚は11mmである。

資料8

深鉢2類である。形態・装飾とも資料7に極めて類似し、同一個体と推定される。口縁部の粘土帯は、指頭押圧の後、さらに角張った工具によって刻まれ、鋸歯状となる。縄文はLRである。器厚9.5mm。

資料9(「大木」の墨書)

基準資料2点が接合した。深鉢2類である。大波状口縁の波頂部に粘土帯を貼付した後、粘土帯に刻みを入れて鋸歯状にする。口縁部にはLR縄文を施した後、3mm程の細粘土紐を貼付し横位、縦位の連続山形文が展開する。粘土紐は1cm程度の長さで折り返され、重なり合って連続する山形文となる。向かって左から右へ施文される(写真図版8-4)。内面はなでの後、軽い磨きを加えられる。器厚は7.5mmである。

資料10

深鉢1類である。縄文を斜めに回転した後、先端の角張った施文具による横位鋸歯状文、縦線文を施す。縄文原体は節と繊維の傾きから、反燃りのLRrと判断した。内面調整は横なでである。器厚8.5mm。

資料11(「大木」の墨書)

深鉢1類である。太い粘土帯を口縁端面に鋸歯状に貼付し、なでつけた後、LR縄文を施す。さらに幅2~4mm程の細い粘土紐でV字状文を施し、その上に短い粘土紐を重ね、梯子状にする。内面には貝殻によるとみられる条痕となでが施される(写真図版10-7)。器厚は8.5mmである。

大木6式土器(第4図12~16, 写真図版2-12~16)

大木6式基準資料は総数5点である。器種はすべて深鉢で、体部が緩やかにひろがり、口頸部がわずかに外彎する深鉢1類、口縁部が外反し、頸部でくびれ、体部が軽くふくら

む深鉢2類と、口縁部が短く外彎し、頸部で明瞭に屈折し、体部上半は強く球形にふくらみ、下半が筒形となる深鉢3類の3類が認められる。

資料12（「大木」の墨書）

完形に復元された深鉢3類である。推定口径27.5 cm、推定器高20.0 cm。口縁部は外面に肥厚し、端面は丸みを帯びる。平坦口縁に2個1対の山形突起が4単位配される。LR縄文が横に回転され、口縁部と体部上半に、半截竹管押しきによる横線文、弧線文、山形文、渦巻文などが展開する。さらにボタン状貼付文が飾られ、口縁端面には小突起が加えられる（写真図版8-5）。内面調整は、丁寧な軽い磨きである。器厚は肥厚する口縁部が14 mm、体部は11 mm程ある。

資料13（「大木」の墨書）

深鉢3類とみられる。大波状口縁で、短い口縁部は外面に肥厚する。端面は丁寧に磨かれ丸みを帯びる。体部にはRL縄文が横に回転される。さらに口縁部から体部上半にかけて、細い粘土紐を貼付し、半截竹管の押しきを加える。この「結節浮線文」（西川1983）の手法で、横線文、山形文、円文などが飾られる（写真図版8-6）。内面は横なでの後、磨きが行われる。器厚は8.5 mmである。

資料14（「大木」の墨書）

深鉢3類で、推定口径25.5 cmである。口縁部は短くわずかに内彎し、外面に粘土帯が貼付され3個1単位の山形突起となる。装飾は、口縁にそって鋸歯状の沈線文が施され、頸部以下に浅い無節Rの縄文が横に施される。頸部に横線の区画文、体部には山形文や縦線文が半截竹管で描かれる。内面は明瞭な擦痕の残るなでの後に、軽い磨きを加えられる。口縁部が体部より丁寧に調整される。器厚は5.5~10 mmである。

資料15

大波状口縁をもつ深鉢1類である。短い口縁部は外面に肥厚する。口縁部には、先端の丸い施文具による深く幅広い短沈線と多截竹管（佐原1981）の押し文が施される。頸部と体部に結節を伴うLR斜行縄文が横方向に施され、さらに頸部に刻みを有する粘土紐がめぐらされる。内面調整は、口縁部では横に、体部では縦または斜めになでが施され、軽い磨きを加えられる。器厚は9 mmである。

資料16（「大木冴貝塚」の墨書）

低い波状口縁を呈し、口縁全体が短く肥厚する深鉢2類である。口縁部に幅広い短沈線と楕円形の浅いくぼみが配され、その下端に指頭押圧が連続する。頸部以下には浅いLR縄文が横に回転される。頸部に半截竹管の沈線が5対10条施される。体部には半截竹管の縦線が一部確認できる。内面は丁寧な磨き調整が行われる。器厚は10 mmである。

大木7a式土器（第4図17~第5図23、写真図版2-17~写真図版3-23）

大木7a式基準資料は総数7点である。器種は深鉢が主体で、鉢形土器が1点確認できた。深鉢は、体部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がる1類、口縁部が外彎する2類、体部が強くふくらみ、短い口縁部が立ち上がる3類の3類型に区分できる。朱書きのラベルが施された土器が6点ある。これらの土器はすべてC地点出土であり、2, 4, 7, 8層から出土している。

資料17（「大木冴貝塚」の墨書、「C7」の朱書）

体部が直立し、口縁部が外彎する深鉢2類である。口縁には低い舌状の突起があり、内面に貼付による稜線を有する。口縁部文様は、半截竹管による横位押し文である。口縁部下端は外面に張り出す段となる。体部には、縦回転の浅いLR縄文が施され、半截竹管の縦線文、斜線文、円孔と半截竹管の刺突を加えられた半球形の貼付文が飾られる。口縁部の押し文と体部の沈線文には同一工具が用いられている。貼付文上を刺突する工具は異なる。内面はなで、器厚は7.5 mmである。

資料18（「大木冴貝塚」の墨書、「C」の朱書）

体部が強くふくらむ深鉢3類の体部下半である。LR縄文を縦に回転した後、多截竹管の沈線と押しきを組み合わせた方形区画文が展開し、渦巻文、懸垂文が加えられる（写真図版8-7）。内面はなでの後、幅2~4 mmの軽い磨きが施される。器厚は9 mmである。

資料19（「大木冴貝塚」の墨書、「C4」の朱書）

体部上半が内傾する鉢形土器である。口縁端部に刻み加えられる。外面全体が無文で、口縁直下に橋状把手を有する。内・外面とも丁寧ななで調整である。器厚6 mm。

資料20（「大木」の墨書、「C8」の朱書）

体部がふくらみ、短い複合口縁が直立する深鉢3類である。口縁は押圧で小波状となる。外面は無文である。内・外面の調整は横なでの後に軽く磨かれる。成形時の接合痕が残る。器厚は7.5 mmである。

資料21（「大木」の墨書、「C2」の朱書）

口縁部がわずかに外彎する深鉢2類。口縁部にはLR結節縄文が間隔を開けて横に4列施される。内面は削りの後、軽い磨きを加えられる。器厚7.5 mm。

資料22（「大木」の墨書、「C2」の朱書）

深鉢1類。口縁は平坦口縁で、複合口縁となる。口縁から体部上半にLR縄文が横に回転される（写真図版8-8）。器面調整はなでの後、軽い磨きが施される。粘土紐の接合痕が内面に明瞭に認められる（写真図版10-8）。器厚は7 mmである。

資料23（「大木」の墨書）

体部上半から頸部にかけて緩やかに外彎する深鉢2類である。頸部には横位区画貼付文がめぐり、山形の垂下貼付文が体部上半に施される。さらに貼付文の上と間に無節Lと結

節縄文Lが縦回転される。内面調整は削りの後に、幅2~4mmの横なでが施される。器厚は7.5mmである。

大木 7b 式土器 (第5図 24~29, 写真図版 3-24~29)

大木 7b 式基準資料は総数6点である。器種は深鉢と浅鉢からなる。深鉢は、口縁部が緩やかに内彎して立ち上がり、長胴の体部をもつと推定される1類と、短い口縁部が内彎し、体部が強くふくらむ2類が認められる。浅鉢は体部が強くひらき、口縁部が内彎する類型である。朱書きのラベルが施された土器が4点ある。これらの土器は、F地点4層、F'地点3層、4層から出土した資料である。

資料 24 (「大木」の墨書, 「F' 4」の朱書)

緩やかに内彎する深鉢1類の大波状口縁である。波頂部が平坦になる。口縁端部内・外面は肥厚する。波頂部下に指頭押圧の加えられる粘土紐貼付文が口縁にそい、垂下貼付文が飾られる。さらに LRL 縄文が、貼付文の上や間の器面に施される。内面は、なでの後に軽い磨きを加えられる。外面調整はなでである。器厚 10 mm。

資料 25 (「大木田貝塚」の墨書, 判読不能の朱書)

資料 24 に類似した深鉢1類である。大波状口縁の平坦な波頂部に刻みが施される。断面三角形の粘土紐が横位・縦位に貼付され、上面には指頭で押圧が加えられる。貼付文の周囲に RL 縄文が施され、さらに口縁にそって沈線が飾られる。内面はなでの後に、軽く磨かれる。外面はなで調整。器厚は 9 mm である。

資料 26 (「大木田貝塚」の墨書)

体部が強くふくらみ、頸部で屈折し、口縁部が内彎する深鉢2類である。頂部が平坦な大波状口縁で、内・外面とも粘土帯が貼付され、波頂部は複雑な断面形状となる。口縁部文様は、波状突起の装飾と渦巻文、口縁にそってのびる横線文で構成される。体部には渦巻文、V字状文、弧線文など複雑な意匠が展開する。これらは、貼付文と多截竹管の沈線を平行させる手法で施文されている。貼付文上に押しきと縄文が施される場合がある。貼付文、縄文、そして沈線と押しきが施される手順となる(写真図版 9-1)。内面はなでが施される。外面無文部の調整はなでである。器厚 8.5 mm。

資料 27 (「大木」の墨書, 「F' 3」の朱書)

資料 24, 25 に共通する深鉢1類である。大波状口縁で、波頂部は平坦になる。装飾は、口縁外縁に撚紐 RL の側面を押圧して短縦線が施される。口縁部には、円文と山形文が貼付された後に、1段のLを軸に0段のIを右巻きにした無節の附加条縄文が施される。内面はなでの後に軽い磨きを加えられる。外面無文部の調整はなでである。器厚 8 mm。

資料 28 (「大木田貝塚」の墨書, 「F' 4」の朱書)

体部が強くひらき、口縁部が緩やかに内彎しながら立ち上がる浅鉢である。口縁端面は内削ぎで、内面に稜を形成する。口縁部文様帯に円盤状貼付文と、撚紐 L の側面圧痕による横

位楕円文が展開する。体部は無文である(写真図版 9-2)。器面調整は、なでの後に、軽い磨きを加えられる。内面は横方向、外面は右下がりに調整される。器厚は 9.5 mm である。

資料 29 (「大木田貝塚」の墨書, 「F' 4」の墨書)

資料 28 と類似した浅鉢で、口縁部がより強く内彎する。推定口径は 22.0 cm である。口縁部文様帯に「x」字状の貼付文が施され、これに沿って楕円形の沈線文が加えられる。体部は無文である。器面調整は、内・外面ともなでの後、磨き調整が行われる。器厚は 7 mm である。

大木 8a 式土器 (第6図 30~40, 写真図版 3-30~写真図版 4-40)

大木 8a 式基準資料は総数 11 点である。器種は深鉢を主体とし、鉢を伴う。深鉢は、頸部でくびれ、口縁部が強く内彎する1類、くびれが弱く、口縁部が緩やかに内彎する2類、体部が軽くふくらみ、わずかにくびれ、口縁部が立ち上がる3類、口縁部が外彎する4類が認められる。鉢は体部から口縁部に向かって外傾する器形である。「B7」の朱書きが2点みられる。

資料 30

わずかに内彎してひろがる鉢である。口縁端部は内・外面に肥厚する。端面に刻みが加えられる。口縁部には隆線(注5)が1条めぐり、これにそって篋による押しきが施される。体部は無文で、粗いなで調整がみられる。内面は横なで。器厚 7 mm。

資料 31 (「大木」の墨書, 「B7」の朱書)

口縁部が軽く外傾する深鉢3類。口縁端部外面に粘土帯が貼付されて肥厚し、断面三角形となる。口縁外縁には、粘土紐による連弧文が展開し、この隆帯上には撚紐 L の側面が押圧される。その下の文様帯には同じ手法で短い縦線文が並列する。内面はなでの後、軽く磨かれる(写真図版 10-6)。器厚は 8 mm である。

資料 32

口縁部がわずかに内彎して外にひろく深鉢3類である。口縁端部内・外面に粘土紐が貼付され、複雑な断面形状を呈する。口縁外縁には押し文が施される。口縁部には、「つ」字状貼付文が配され、その周囲に撚紐 RL の側面を押圧した短い縦線文列、貼付文上には押し文が加えられる。口縁部文様帯の上限は横位隆線文、下限は刻みをもつ横位隆線文で区画される。頸部には横位沈線文がめぐる。押しき、刻み、沈線は同一施文具による。隆線の断面は丸く、器面に軽く貼付され、押しやなでつけの痕跡はみられない。最初に隆線が貼付され、押しき、刻み、沈線の順に施され、最後に撚紐側面の押しきを加えられる。内面は横なでの後、軽い磨きで調整される。器厚は 7.5 mm である。

資料 33 (「大木」の墨書, 「B7」の朱書)

口縁部が外彎する深鉢4類で、緩やかな波状口縁となる。

波頂部の内面に稜がある。端面には貼付装飾が施される。口縁部は、横位隆線と縦位に並列する撚紐側面圧痕の組み合わせからなる帯状の文様2帯が上下を区画し、橋状把手が区画隆帯を連結する。内面は、なでの後に軽く磨かれる。器厚11mmと厚手である。

資料34

口縁部が内彎する波状口縁の深鉢3類。端部は内面に稜があり、外面に貼付され、断面三角形を呈する。口縁に山形突起を有し、その上面に粘土紐貼付文が施される。口縁外縁にはD字状刺突文がめぐり、これより下位はLR縄文が縦に回転され、横位沈線文が2条めぐり、内面はなでの後、軽い磨きを加えられる。器厚5mm。

資料35（「大木」の墨書、「19」のスタンプ）

体部上半から口縁部にかけて直線的にひろがる鉢形土器である。平坦口縁に角状、低い山形の突起を有する。口縁外縁に狭い無文帯がめぐり、その下には隆線と撚紐の側面圧痕で横位楕円文が飾られ、この区画文内部に円形竹管の交互刺突文が加えられる。体部には、隆線と撚紐の押圧による蕨手状などの曲線文が展開し、LRとRL（閉端を有する）による羽状縄文がその下位に施される。最初に隆線が貼付され、撚紐が押圧された後に、刺突と縄文の回転施文が行われる（写真図版9-3）。内面は軽い磨き。器厚6mmと薄手の土器である。

資料36

頸部でくびれ、口縁部が緩やかに内彎する深鉢2類である。口縁端部には粘土紐が貼付され、内・外面に肥厚する。口縁部上半は横位隆線が橋状把手で連結され、楕円文が連続する。口縁部下半はLR縄文の上に三角形の貼付文が展開する文様帯となる。頸部には隆線と沈線による横線と波状文がめぐり、体部には隆線と沈線で直線文、曲線文が施される。縄文を回転した後に、隆線が施され、沈線が加えられる手順である（写真図版9-4）。内面には篋などが行われる。器厚は8.5mmである。

資料37

頸部で明瞭に屈折し、口縁部が強く内彎する深鉢1類である。端部には粘土紐や突起が盛んに貼付され、口縁にそって押し文がめぐり、口縁部下半には縄文が施され、沈線による2条1組の連弧文が展開する。頸部には横線がめぐり、内面はなで、器厚6mmである。

資料38

頸部で緩やかにくびれ、口縁部は軽く内彎する深鉢3類である。口縁に突起を有し、その上に弧線が貼付される。端面には撚紐LRが押圧され、小波状となる。口縁外縁には押し文、その下には撚紐LRの側面押圧による縦線文が並列する。頸部は3条の横位沈線文で区画される。体部は、縦回転のLR縄文の上に、沈線が屈折して展開する。手順は、縄文回転の後に、撚紐の側面が押圧され、最後に沈線文が加えられる。内

面は横なで。器厚は7.5mmである。

資料39（「大木」の墨書）

大波状口縁を有し、口縁部が内彎する深鉢2類である。口縁端面は内削ぎに整形される。口縁部の文様構成は資料36に類似する。上半は上面に沈線を伴う断面の丸い隆帯と橋状把手が貼り付けられ、下半は縦回転のLR縄文の上に渦巻状の隆線文が貼付される。把手部の隆線は器面になでつけられるが、渦巻文の隆線はほとんど調整されない。内面にはなでの後、軽い篋磨きが施される。器厚は7mmである。

資料40（「大木」の墨書）

体部は軽く膨らみ、頸部で緩やかにくびれ、口縁部がわずかに内彎する深鉢3類で、推定口径35.5cmと比較的大型である。平坦口縁で、端面には粘土紐の波状文が貼付される。口縁部は2条の横位隆線で上下が区画され、その間に粘土紐の波状文が貼付される。横位隆線は橋状把手によって連結される。頸部から体部にかけてLR縄文が縦に回転され、その上に先端の丸い施文具による3条1組の沈線で頸部の横線文、体部の直線文、曲線文が描かれる。内面は篋などが施される。器厚は10mmである。

大木8b式土器（第7図41～49、写真図版4-41～49）

大木8b式土器の基準資料は総数9点である。器種は深鉢と鉢で構成される。深鉢は、体部が軽く膨らみ、頸部で明瞭にくびれ、口縁部が強く内彎するキャリパー形深鉢(1類)と、体部がふくらみ、口頸部が緩やかに外反する深鉢(2類)に大きく区分される。鉢は体部が強くひろがり、口縁部が内彎する器形である。山内の写真は2枚に分かれており、深鉢1類のまとまりと、深鉢2類と鉢の可能性のある土器のまとまりとなっている。朱書きラベルは、「B6」(5点)と「B7」(1点)で、B地点6層と7層から出土している。

資料41（「大木冨貝塚」の墨書）

深鉢1類。推定口径29.5cm。口縁部は隆線による横線文が上下を画し、さらに2条1組の隆線が鍵の手状に屈折しながら展開する。隆線は頂部が丸く、縁辺は器面にあまりなでつけられない。頸部以下には縄文が施されるが、頸部の縄文は散漫である。内面はなでの後、軽く磨かれる。器厚9.5mm。

資料42（「大木冨貝塚」の墨書）

深鉢1類。口縁部に粘土帯が貼付され、沈線の渦巻文、弧線文が展開する。隆線頂部は軽く磨かれ、平坦になる。頸部から体部にかけて無節Lの縄文が縦に施される。内面はなでの後、軽い磨きを加えられる。器厚6mm。

資料43

深鉢1類。推定口径15.0cmと比較的小型である。口縁部文様帯、頸部無文帯、体部文様帯という文様帯構成は大木8b式の典型と言える。

口縁部の装飾は縦回転のRL縄文を施し、文様帯の上下を隆線で区画し、その間に隆線と沈線で渦巻文と曲線文を展開

する。山内清男の「I文様帯」である(山内編1964)。隆線は断面台形で、頂部は磨かれてやや丸みを帯びる。沈線は先端の丸い工具による。頸部は横方向に磨きが施され、幅広い無文帯となる(写真図版9-5)。

体部には縄文の上に2条1組の沈線による文様が施される。文様帯の上限を横線で区画し、その下に横走あるいは縦走する沈線によって渦巻文が連結され、広く展開する。山内の「II文様帯」に相当する。沈線は口縁部のもとの同一工具である。沈線部分は軽くなでられ、沈線間の縄文が一部磨り消される(写真図版9-6)。内面はなでの後、軽い磨きが施される。器厚6mm。

資料44(「大木」の墨書、「B6」の朱書)

体部上半から口縁部にかけて緩やかに内彎しながら立ち上がる深鉢。波状口縁で、端面は削りによって内削ぎとなる。波状口縁に沿って隆線が貼付される。隆線の縁辺はほとんど調整されないが、一部沈線がそう。体部にはLR縄文が縦に回転される。内面は削りの後、軽く磨かれる。器厚6mm。

資料45(「大木」の墨書、「B7」の朱書)

深鉢2類。推定口径11.5cmの小型土器である。貫通孔のある把手を有する。口縁外縁には隆帯がめぐり、これにそって沈線が加えられる。頸部から体部にかけてRL縄文が縦に回転される。内面は、なでの後軽く磨かれる。器厚5.5mm。器面に炭化物が付着し、貫通孔の中は特に著しい。

資料46(「大木」の墨書、「B6」の朱書)

深鉢2類。口縁部はナデによる無文帯で、頸部には隆線2条、沈線3条の横位区画文がめぐり、体部には縦回転のLR縄文の上に、沈線による渦巻文などが連結されて文様帯に広く展開する。隆線は断面台形、沈線は先端の丸い工具を用いる。内面には、口縁直下に凹線が1条めぐり、なでの後に軽い磨きが行われる。器厚6.5mm。

資料47(「B6」の朱書)

深鉢1類もしくは鉢形土器。口縁部には隆線と沈線を組み合わせ渦巻文と楕円文が施される。隆線は断面台形で、頂部が丁寧に磨かれ、丸みを帯びる部分がある。沈線は先端の丸い棒状工具による。体部は無文で、篋磨きが施される。内面にも篋磨きを加えられる。器厚8mm。

資料48(「大木」の墨書、「B6」の朱書)

深鉢1類か鉢形土器とみられる。口縁部に粘土帯を貼付した後、沈線で渦巻文と楕円文が描かれる。隆線は断面台形で、頂部に磨きが施され、やや丸みを帯びる。沈線は先端の丸い工具による。体部は無文で、篋磨きを加えられる。内面は軽い磨きである。器厚6mm。

資料49(「大木」の墨書、「B6」の朱書)

口縁部が外彎する深鉢2類もしくは鉢形土器。大波状口縁で、端部は粘土帯貼付により肥厚し、断面三角形となる。この口縁部隆帯には、沈線によって波頂部に渦巻文が配され、それらが横に連結されて展開する。頸部には横方向の軽い磨き

が施され、無文である。内面も軽く磨かれる。器厚8.5mm。(早瀬)

大木9式土器(第8図50~第9図64, 写真図版5-50~写真図版6-64)

大木田貝塚出土大木9式基準資料は、総数15点である。器種は、キャリパー形深鉢(1類)、口頸部が緩やかな広がりを見せる深鉢(2類)と、2種類の深鉢が主体である。さらに、頸部が強くとびれ、口縁部の広がる壺に近い深鉢が含まれ、器種の変異がうかがえる。これらの資料のうち7点に「B6」、「B45」、「B3」と朱書きがあり、B区の6層から3層にかけて出土した層位的関係が確認できる。大木9式の器種構成、意匠体系に関し、山内による層位にもとづいた型式変遷の理解をこの標識資料でうかがうことができる。

資料50(「大木田貝塚」の墨書、「B6」の朱書)

整ったキャリパー形深鉢(1類)。推定口径25.0cm、現存器高12.5cm。頸部で緩やかに外彎し、口縁は強く内彎して立ち上がる。口縁と頸部は接合部で軽く内屈している。体部は緩やかなふくらみをもつと推定される。

装飾は、口縁部文様帯に、太い粘土帯を貼付した横帯区画に唐草文状渦巻文の隆線文が施される。粘土帯は縄文を施した後に貼り付けられ、その縁を丁寧に凹線でなぞっている。頸部には幅4cmほどの無文帯がめぐり、丁寧な横方向の磨きを加えられる。頸部と体部との境には2条の太い凹線がめぐり、

体部には縄文施文後に粘土帯で楕円文が飾られ、突帯上に篋磨きを加え、両側を凹線で縁取りする。また、突帯、頸部には薄く器面に粘土を塗り、整形する。RLR縄文を縦に回転している。隆線文、器面の磨きは縄文施文後に加えられる。器厚は頸部で6mm。

資料51(「大木」の墨書、「B6」の朱書)

口縁部が緩やかに広がる2類の深鉢。低い大波状口縁をもつ。口縁に1条の太い沈線がめぐり、口縁から体部全面に渦巻文と2条1組の複雑に連繋する隆線文が展開する。RL縄文が縦に器面に施され、さらに粘土紐を貼付し、その上面、側縁を丁寧に磨いて調整している。内面は、横に磨きを加えている(写真図版10-7)。器厚は7mmで、焼成、保存状態が良好である。

資料52(「大木」の墨書、「B6」の朱書)

小型キャリパー形土器(1類)である。口頸部が緩やかに内彎する。頸部は外彎してやや強く広がる。口縁部文様帯はなく、体部文様帯が口頸部から体部を広く飾る(注6)。左、右巻きの渦巻文と派生する隆線文が複雑に展開する。渦巻文は高く突出する。RL縄文が口頸、体部に横に回転される。後に、隆帯を貼付し、その両側に凹線を加え、さらに磨いている。器厚は5mmで、比較的薄手である。

資料 53(「大木」の墨書, 「B6」の朱書)

基準資料 2 点が接合した。強いふくらみをもつキャリパー形深鉢(1 類)で、頸部以下を欠く。口縁と体部文様帯が一体となる。口縁は文様に依じて微かに波状を呈する。渦巻文を連繫する突帯が縦横にのび唐草文の意匠を構成する。渦巻文の剥脱した部分に LR 縄文が確認できる(写真図版 9-7)。縄文は口縁部に近い数段は横に、その下では縦に回転施文される。突帯は幅 8 mm、高さ 5 mm ほどあり両側を丁寧に凹線で整えている。内面は丁寧な横の太い篋磨き調整がみられる。器厚は 8.5 mm。

資料 54(「大木」の墨書)

52, 53 と類似のキャリパー形深鉢(1 類)。口縁が大きく内彎する。頸部は緩やかに外彎し、全体に口頸部のひろがり強い。平坦な口縁に渦巻文の施された突起と、太い隆帯による渦巻文、楕円文の飾られた横帯区画文が展開する。体部文様帯は、口縁部文様帯の直下に太く浅い凹線と隆帯による縦位楕円文と渦巻文が展開する。太い LR 縄文を縦方向に回転施文した後、隆帯、篋磨きを加える。内面は丁寧に横の磨きが施される。器厚は 7 mm と比較的薄手である。

資料 55(「大木」の墨書, 「B」の朱書き)

キャリパー形深鉢(1 類)。丁寧に篋磨きをした口縁端部、内彎する口縁と緩やかに外彎する頸部をもつ。口縁部には文様帯が施され、頸部は無文帯がめぐり、体部を欠く。口縁部文様帯には稜線をもつ隆帯が楕円形、波状にめぐり、RL 縄文を縦位に回転し、隆帯、篋磨き・凹線文が加えられる。器厚 6 mm。

資料 56(「大木」の墨書, 「B45」の朱書)

口縁部が緩やかに内彎するキャリパー形深鉢(1 類)。平坦口縁で内、外面に篋磨きを加えている。口縁部文様帯には、幅 4 mm ほどの篋描の楕円文が横に並び、体部文様帯は、2 条の並行する沈線で縦方向の楕円文が施されている。楕円文の区画内に LR 縄文を充填する。縄文は口縁部では横、体部では縦方向に施される。その後さらに、沈線文を描き直し、区画文の周囲を軽く篋磨きで調整している。内面には丁寧な篋磨きが施されている。頸部内面に絞りの痕跡とみられる縦方向の窪みが並列する。器厚は 8.5 mm と厚手である。

資料 57, 59(「大木」の墨書)

57 は、体部の上位で緩やかにくびれ、口縁が大きく外彎してひらく深鉢 2 類で、大波状口縁である。波状突起は推定 4 個、口縁に幅 2 cm ほどの無文帯がめぐり、丁寧な横方向の篋磨きが施される。体部文様帯の上限に幅 4 mm ほどの沈線 3 条が口縁の波形にそってめぐり、体部文様帯には篋描の楕円文、垂下する逆 U 字文が配される。さらに楕円文を横に連繫する波状文が加えられる。RL 縄文が縦方向に回転施文された後、篋描文が施されている。さらに沈線区画外と沈線を丁寧に磨く。最上段の楕円文は区画内を丁寧に磨きによってくぼめ、装飾の凹凸が顕著である。縄文は太くあらい(PL. 9-8)。

内面は丁寧な磨きが横方向に加えられ、器厚 5.5 mm、薄手で焼き締まっている。

59 は 57 と類似した大波状口縁の大型深鉢(2 類)で、共通した意匠構成をとる。口縁部の波形にそって 2 cm ほどの無文帯と 3 条の凹線がめぐり、縦長楕円文が並列し、縄文を遺した部分と丁寧に篋磨きを加えた単位がみられる。粗い RL 縄文が縦位に施されている。内面には丁寧な磨き加えられる。器厚 9 mm で厚手、焼成が良好である。

資料 58(「大木」の墨書, 「B45」の朱書)

キャリパー形深鉢(1 類)。推定口径 31.5 cm。口縁端面が内側に肥厚する。口縁部文様帯は縦位隆帯で区画される。隆帯には太く浅い刻線と円形のくぼみが施される。さらに区画内に太い凹線の楕円文が施され、その内側に 8 条の弧線が充填される(写真図版 10-1)。内面は丁寧な磨き加えられる。本資料は、搬入土器で中部地方の曾利式土器に類似する。重要な広域編年基準資料である(注 7)。

資料 60(「大木」の墨書)

緩やかに外彎して広がる口頸部をもつ深鉢(2 類)。平坦口縁でキャリパー形深鉢(1 類)とセットになる器形である。装飾は、口縁部から体部全体に展開し、太い篋描の縦位楕円文、逆 U 字状垂下文が規則的に飾られ、文様内に RL 縄文が縦に回転施文される。区画外は丁寧に篋磨きをしている。内面には篋磨きがみられる。器厚は、9.0 mm で厚手の土器である。

資料 61(「大木」の墨書, 「B・」の朱書)

体部上位で強くくびれ、口縁部が緩やかにひろがる波状口縁の深鉢。資料 57, 58 の深鉢と類似した口頸部の屈曲をみせるが、頸部のくびれが強く、口径 17 cm ほどの小型土器である。壺への機能変化がうかがえる。突起は 3 個と推定され、口縁にそって太い沈線 2 条がめぐり、口縁の無文帯は軽く篋磨き加えられる。2 条の並行沈線が口縁にそって波状にめぐり、体部文様帯には縦位の楕円文、下方が開放した逆 U 字状垂下文、渦巻文、重楕円文が施される。LR 縄文は沈線区画内に認められるが、沈線の方が新しい。渦文や楕円文の間の空隙は丁寧に篋磨かれる。内面にも丁寧な横方向の磨きがみられる。

資料 62(「大木田貝塚」の墨書, 「B・」の朱書)

体部から頸部にかけて強くくびれ、頸部は軽く外彎し、口縁部が外反する。資料 61 と共通した器形の壺ともよべる小型深鉢である。口頸部が短い。口縁に無文帯、下限に 2 条の平行線がめぐり、頸部から体部全体に文様帯が展開する。楕円文と下方に開口する逆 U 字状垂下文が交互に並列する。著しく単純化した沈線文である。RL 縄文を斜位に回転施文し、沈線文を加え、軽く楕円文・垂下文間に篋磨きを施している。内面の調整は、口頸部が狭いため、口縁付近は磨きがみられ、下半はなでにとどまる。壺の調整に近い。器厚は 4.5 mm で薄手、焼成良好な土器である。

資料 63(「大木田貝塚」墨書, 「B3」の朱書)

資料 60 と共通する 2 類深鉢。口縁は丁寧な篋磨きで整形される。文様帯は口縁から体部に展開する。LR 縄文が横、縦に施され、太い沈線による楕円文、垂下文が描かれる。文様区画外には丁寧な篋磨きが加えられる。

資料 64(「大木」の墨書, 「山内清男氏寄託」のシール)

口径 16 cm (把手部では 21.4 cm)、頸部径 10 cm ほどの深鉢。口縁は外彎してひろがり、大波状口縁に透かし孔をもつ把手 4 個がつく。頸部は強くくびれ、体部がふくらむ。広口壺に近い器形である。体部下半を欠く。口縁には太い粘土紐による渦巻文と凹線文が飾られる。頸部から体部にかけて隆帯で渦巻文が施される。多数の渦巻文が隆帯で連結され、唐草文的意匠が展開する。地文の RLR 縄文は貼付隆帯によって充填される。縄文施文後に隆帯に磨き、太い沈線による縁取りが加えられる(写真図版 10-2)。土器内面は入念な篋磨きが施される。

大木 10 式土器 (第 9 図 65~第 10 図 75, 写真図版 6-65~写真図版 7-75)

大木 10 式標識資料は、総数 14 点である。この型式の器種には、口頸部が緩やかに内彎し、大きな波状を呈するキャリパー形深鉢 1 類(注 8)と、口頸部がわずかに外彎して立ち上がり、体部中位が軽くふくらむ深鉢 2 類の 2 類型、口縁が外彎し、頸部に隆帯のめぐる鍔付広口壺、そして定型的な注口鉢、小型浅鉢が含まれる。資料 73 には B2 の朱書きがあり、B 区の 2 層から出土し、大木 9 式の上層にあることがうかがえる。

資料 65(「大木」の墨書, 「山内清男氏寄託」のシール)

小型鉢。わずかに内彎する口縁をもつ。口径 13.3 cm、底径 5.7 cm、器高 7.2 cm である。口縁に 2 個 1 組の小型突起が 1 組飾られる。幅 2 mm ほどの細沈線が口縁にそってめぐり、2 個の山形突起の下で途切れ、2 条の弧線が施される。さらに、2 個 1 対の孔があげられる。縄文は LR を横に回転している。

資料 66 (「大木」の墨書)

直線的に強くひらく浅鉢。推定口径 17.0 cm。口縁部に粘土隆帯で画された無文帯が施される。波濤文の一部とみられる。隆帯区画文には RLR 縄文が充填され、隆帯にそって磨きか加えられる。

資料 67, 68

体部上半から口縁部にかけてわずかに外彎して立ち上がり、中位で軽くふくらむ深鉢 (2 類)。資料 68, 69, 74, 75 が同類型である。この土器は山形突起をもち、突起下に鰹状の粘土帯が飾られる。口縁の内面は内削ぎになり、突起には縦位の楕円形粘土塊が貼付される。また口縁には丁寧な篋磨きによる無文帯がめぐり、体部上半には 1 段の R を軸に巻いた撚糸文が施され、粘土隆帯、縦位弧線、垂下線、磨きの順に施される。磨消縄文手法が確立している。68 (深鉢 2 類) は、隆帯、太い RL 縄文、丁寧な磨きの順に飾られる。

資料 69 (「大木田」の墨書), 70 (「大木」の墨書)

小型深鉢 69 は、資料 75 を小型にした類型 (2 類) で推定口径 12.0 cm。装飾は共通する。0 段の太い r を左巻きにした附加条縄文 (軸の原体は不明) が縦に回転され、弧状の沈線で区画文が施される。軽く内面、外面を磨いている。70 は緩やかに内彎気味に立ち上がる。口縁に突起 1 個をもつ。頂部に小さな刺突文がみられる。1 条の細い沈線がめぐり、体部の縄文は条間が広く、条・節の角度から、R を左巻きにした附加条縄文 (軸の原体は不明) を縦に回転したとみられる。

資料 71 (「大木」の墨書)

基準資料 2 点が接合した。推定口径 25.0 cm、現存器高 11.5 cm の注口鉢である。口頸部は軽く外彎して立ち上がる。体部との境は明瞭に内屈する。真っ直ぐにひろがる口縁には 4 個の山形突起をもつ。1 個は注口と対応する。注口は鉢の体部と口頸部の屈折部から立ち上がる。やや扁平の筒状を呈する。山形突起と注口部の中軸線上に粘土隆線が施される。他の突起には楕円形の大きな穿孔がある。また、鰹状の突帯が加えられ、これにそって刺突列がのびる。体部文様帯には、頂部が稜を形成する隆線による渦巻文、弧線文、波状文が横に連なり、L の撚糸文と刺突列が充填される(写真図版 10-3)。内面は篋磨きで調整される。

資料 72(「大木」の墨書)

資料 71 と類似した器形の鉢である。口頸部は軽く外彎して立ち上がる。体部と口頸部の境で明瞭に内屈する。屈折部に粘土帯がめぐり、屈折部から口縁端面に幅広い橋状把手が飾られる。口頸部はなでと磨きによって無文帯となる。橋状把手には太い刺突列点文 13 個 4 段が加えられる。また、頸部屈曲部の隆帯上に刺突文が 1 列めぐり、体部には頂部に稜をもつ粘土帯で楕円文など曲線文が飾られる。この装飾は、大木 10 式の典型的な曲線区画文とみられる。

資料 73(「B2」の朱書き)

推定口径 12.5 cm の鍔付土器。内傾する短い口縁をもち、橋状把手をもつ突帯 2 条がめぐり、樽形のふくらみをもつ体部には、篋描の沈線文、縦走の R 撚糸文が施される。充填縄文手法である。さらに篋による軽いなで仕上げられる。小型ではあるが、中期最終段階の鍔付土器で、後期の再葬墓に用いられる鍔付土器の先行型式として重要な資料である。

資料 75

推定口径 33.0 cm の大型深鉢 (2 類)。口縁は軽く外反し、内面屈折部に稜が形成される。体部上半はわずかに外彎して立ち上がり、体部はほぼ直立する。口縁に無文帯がめぐり、体部には篋描文を施し、R 縦走撚糸文を回転施文した後、隆帯を貼付しさらに沈線文の調整と篋磨きで仕上げている(写真図版 10-4)。隆帯には刻みが加えられている。意匠は逆 S 字文である。資料 74 の深鉢 (2 類) は 75 と同様な意匠構成である。L の撚糸文、沈線文、磨きの工程で施されている。

(須藤)

第1表 大木式土器標識資料の出土地点・層位（ ）内は個体数
Table 1. Excavated locations and strata of the type artifacts of the Daigi types

	B 地点	C 地点	E 地点	F 地点	F' 地点
2層	大木 10 式 (1)	大木 7a 式 (2)	-	-	-
3層	大木 9 式 (1)	-	-	-	大木 7b 式 (1)
4層	大木 9 式 (2)	大木 7a 式 (1)	-	大木 7b 式 (1)	大木 7b 式 (2)
5層		-	大木 4 式 (1)	-	-
6層	大木 9 式 (4) 大木 8b 式 (5)		大木 4 式 (2)	-	-
7層	大木 8b 式 (1) 大木 8a 式 (2)	大木 7a 式 (1)	-	-	-
8層	-	大木 7a 式 (1)	-	-	-
層位不明	大木 9 式 (3)	大木 7a 式 (1)	-	-	-

4. 大木式土器標識資料の特徴とその意義

東北大学文学研究科考古学陳列館所蔵の大木冴貝塚標識資料は、縄文文化研究の指導的研究者、山内清男が調査した一括土器群であり、現在基準となっている縄文土器編年の基本を確立した山内の研究方法を解明できる重要な資料である。

大木冴貝塚は、塩釜湾に臨み、豊かな水産資源に恵まれた大規模拠点集落が形成した貝塚である。貝層の広がりには 37,823 m² に及び、海岸段丘の斜面にきわめて保存状態の良い貝層が厚く堆積する。多くの地点貝塚と大規模な貝層が複雑に形成され、前、中期の縄文土器が豊富に出土する。

山内は、この貝塚の 7 地点で貝層を発掘し、出土した土器について、堆積層の一括性、層位関係にもとづいて、器種・器形、装飾体系の型式学的検討を進めている。

資料の内面には、朱で B, C, E, F, F' と地点名が書き込まれている。各土器型式の朱書き地点名を検討すると（第 1 表）、32 点について確認でき、B 地点から大木 8a, 8b, 9, 10 式、C 地点で大木 7a 式、E 地点で大木 4 式、F, F' 地点から大木 7b 式が出土している。B 地点出土土器には 2 層から 7 層までの記入があり、土器の型式変遷と相関する。B 地点の 7 層から大木 8a 式と 8b 式、6 層から大木 8b 式と 9 式、3, 4, 5 層から大木 9 式、2 層では大木 10 式が出土しており、層位に応じた土器型式の漸移的変遷が捉えられる。この B 地点における大木 8a 式から 10 式の層位的出土状況については、昭和 2 年秋の B 地点調査に関する伊東信雄の記述と一致している（伊東 1973）。

本論では、縄文時代前期大木 4 式から中期大木 10 式の各土器型式について、器種構成、形態、装飾意匠、装飾法のあり方と変遷を検討した。

大木 4 式の資料は、深鉢と鉢で構成される。深鉢は口頸部がわずかに外彎する 1 類深鉢、口頸部が強く外彎する 2 類深鉢と、体部の膨らむ 3 類深鉢に区分される。鉢は類例が少なく、まれな存在である。装飾は、粘土紐を貼付した波状文、格子目文などの幾何学的な意匠や、沈線による連続山形文を特徴とする。

大木 5 式では、大木 4 式の器種構成を受け継ぎ、3 類型の深鉢が認められる。1, 2 類は基本的に踏襲され、3 類は体部上半が球形にふくらみ、体部下半が円筒状となる。1, 2 類には粘土紐貼付文と沈線文で連続山形文や梯子状文が施される。3 類は三角形や山形などの意匠を組み合わせた細やかで精緻な文様構成をみせる。このように深鉢の 1, 2 類と 3 類では、装飾においてもまったく異なっている。大きく 2 者の明瞭な区分が成立していると言える。1, 2 類の装飾は大木 4 式を引き継いだものとみられるが、3 類の装飾については関東、北陸地方など別の系統との関係が考えられる。

大木 6 式では、大木 5 式で成立した深鉢の類型区分が確立する。口頸部が緩やかに外彎する 1, 2 類深鉢には、肥厚する口縁部に太い沈線文、体部には縄文と半截竹管文が展開し、ボタン状貼付などが配される。これに共伴する 3 類深鉢は、半截竹管による押しきりや結節浮線文の手法で渦巻文、山形文などが展開する。3 類では他地域との関係をうかがわせる装飾が目につく。こうした 3 類深鉢を一定量共伴することがこの型式の特徴となっている。

大木 7a 式の標識資料では、大木 5, 6 式を特徴づけていた深鉢の類型構成がみられなくなる（注 9）。深鉢 1, 2 類に、体部が強くふくらむ 3 類深鉢が加わり、鉢形土器が伴う器種構成となる。深鉢には貼付文、竹管文、結節縄文などの多様な装飾がみられる。他方、複合口縁をもち、縄文のみの深鉢や無文の鉢などが目につく。装飾的な深鉢を主体とする前期の土器群と区分し、こうした鉢や無文に近い類型が定着した型式を中期に位置づけた山内の型式学的な認識を読み取ることができる。

大木 7b 式では、大波状口縁をもち、口縁部を中心に体部まで文様がひろがる装飾的な深鉢 2 類型と、平縁で口縁部に文様が展開し、縄文が施されないことが多い浅鉢を含む中期的な器種構成が確立する。装飾は大木 7a 式にみられた粘土紐貼付、竹管文に加えて、撚紐側面の押圧が多用されるようになり、渦巻文、楕円文、三角形文などの複雑に連繋する意匠が展開する。

中期中葉の大木 8a 式は、7b 式を引き継いで、深鉢と鉢、浅

鉢で構成される。深鉢の器形は4類型認められ、変化に富む。口縁部の内彎する深鉢(1, 2類)が多くみられ、キャリパー形に近い器形が現れる。口縁部文様帯には把手、突起、隆線、沈線、撚紐の押圧など多彩な手法が用いられ、幅の狭い文様帯が重畳する。体部文様帯には隆線や沈線による渦巻文や、それを連繋する直線・曲線文など入り組んだ文様が施される。形態、装飾ともに極めて多様である。

大木8b式では、キャリパー形の深鉢1類が確立し、外反口縁の深鉢2類、口縁の内彎する鉢が伴う。キャリパー形深鉢1類では、頸部の無文帯を挟んで、口縁部と体部の文様帯が明瞭に分化し、山内清男がI文様帯、II文様帯とした文様帯構成がみられる(山内編1964)。隆線と沈線の渦巻文が複雑に連結され、口縁部では横に、体部では縦横に展開する。多様な大木8a式の器形、装飾手法や意匠などを選択的に受け継ぎ、著しい定型化をみる。

大木9式土器の資料は、大木8b式から2種類の深鉢を受け継ぎ、さらに口頸部の強くくびれる壺に近い形態の深鉢が加わる。隆帯文をもつ土器群と沈線文の土器群とがあり、装飾は隆帯文と磨消縄文、充填縄文手法が発達する。山内は、この土器群のまとまりを写真に表現しており(興野1996図版104~106上段)、器形、装飾の型式内変化をすでに明らかにしている。また、B地点の4・5層から出土した搬入土器を大木9式標識資料に加えており、関東地方や中部地方の土器型式との並行関係を確認できる基準資料としている。このような資料は、山内の縄文土器研究の実証性を如実に示している。

大木10式土器は先行型式からの2種類の深鉢を主体とし、注口鉢、鍔付広口壺で構成される。装飾は、沈線、隆線による帯状の文様が展開し、磨消縄文あるいは充填縄文手法が発達する。大木9式の意匠から大きな変化がみられる。幅広い文様帯が口縁から体部中に展開し、その構成にも変化が生じている。

このように、大木冨貝塚出土標識資料は、山内が層位的に調査した一括資料を卓越した観察力で検討し、土器型式の編年を進めたことを理解することのできる資料である。

この貴重な学術資料を検討した結果、日本先史学の基盤を確立した山内清男の編年研究、型式学研究(注10)には層位的関係が基本となっていること、1遺跡の一括資料を入念に検討し、土器組成、装飾・施文手法など型式内容とその変遷を明確にしていること、そして他地域からの搬入土器を抽出し、広域の土器型式編年について検討していることを理解できた。

む す び

山内清男の実証的研究は、膨大な調査資料が蓄積されている今日、その方法を十分に理解し、発展、継承していくことが極めて大切であると言える。また、ここで取り組んだよう

に、基礎となる資料を明確に提示していく努力が不可欠であろう。

(早瀬・菅野・須藤)

注

- (1) 『日本石器時代人民遺物発見地名表 第四版』(東京帝国大学1917)にはその名が見られず、『日本石器時代遺物発見地名表 第五版』(東京帝国大学1928)に初めて現れる。
- (2) なお、標識資料に含まれない土器破片1点に「F4」の朱書きがあり、F地点の存在も確認されている。
- (3) 松本は土器における文様帯の推移を「第一次模様」から「第四次模様」への変遷過程として捉え(松本1919d, e)、土器の図に文様帯の番号を記した(松本1919b, c)。山内清男の文様帯系統論に大きな影響を与えた研究と言える。
- (4) 法量の計測値については、口径、底径、器高を0.1cm単位で表し、推定値の場合は0.5cm単位とした。器厚は0.5mm単位で示した。
- (5) 器面に突出する文様を表す用語として、「隆線」、「隆帯」、「突帯」、「浮線」などが用いられる。山内清男の用語(山内1929a, 1939-41, 山内編1964など)を確認したところ、基本的に「隆線」を用い、「隆帯」を併用している。「隆帯」は粘土帯の上面に縄文や刻みが加えられ、帯状に展開する文様(円筒上層式など)や、横帯となって器面をめぐる粘土帯に対して用いられる傾向がある。本稿ではこのような山内の用法に従い、用語の統一をはかった。
- (6) 大木9式土器の文様帯は、II文様帯が体部全体に繰り広げられる。大木10式のII文様帯は、体部上半に展開する。下半には縄文が施される。こうした大木10式の文様帯構成は、後期の装飾のあり方へと展開していく。
- (7) この搬入土器については、中部高地、関東北部にひろく分布する曾利式土器と類似する型式特徴がみられ、こうした地域からの搬入土器と推定される。水沢教子氏から、北関東地方の可能性があるが、関連地域における資料の検討が必要であるという教示をえた。本資料と類似する土器が、福島県伊達郡飯野町和台遺跡のSK2275から、大木9式土器と共に出土している(新井2004)。
- (8) この類型は、本資料には認められない。
- (9) 前期の3類系統の深鉢は、大木7a式にも伴うことが知られている(藤沼1969, 相原1986)。前期と中期の特徴を合わせもつ器種構成は、この型式の過渡的様相を表している。
- (10) 山内清男の型式学的研究法については、『日本原始美術 1 縄文式土器』(山内編1964) pp. 148-149において論ぜられている。

謝辞

本稿を作成するに当たって多くの方から貴重なご助言とご指導を賜った。心から感謝を申し上げます。

ことに、芹沢長介東北大学名誉教授をはじめ、興野義一、水沢教子、菅原哲文、高木 晃、相原淳一の諸氏には山内基準資料の内容について様々な教示を頂いた。また、森田賢司、久末恵輔を中心とし、山本弦、村田匠、小佐野雅志、佐藤秀一、鈴木啓兼、千葉麻衣子、山本達人ら考古学研究室の学生に協力を頂いた。

引用文献

- 相原淳一 1986『小梁川遺跡』『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書II 小梁川遺跡・遺物包含層土器編・原頭遺跡・養源寺跡・大熊南遺跡(宮城県文化財調査報告書第117集)』宮城県教育委員会 pp. 1-895
- 相原淳一 1999『列島における縄文土器型式編年研究の成果と展望(1) 仙台湾周辺 早期~中期』『縄文時代』10 pp.

197-202

新井達哉 2004 「和台遺跡 2 (飯野町埋蔵文化財報告書第 6 集)」飯野町教育委員会

伊東信雄 1957 「古代史 第一章 縄文式文化時代」『宮城県史 1 (古代史・中世史)』財団法人宮城県史刊行会 pp. 3-51

伊東信雄 1973 「古代東北発掘」学生社

伊東信雄 1977 「山内博士東北縄文土器編年の成立過程」『考古学研究』24-3・4 pp. 164-170

伊東信雄 1981 「宮城県史 34 (資料篇 11 史料集 V 考古資料)」財団法人宮城県史刊行会

小笠原好彦 1968 「東北地方南部における前期末から中期初頭の縄文式土器 —昭和 38 年発掘宮城県大木田貝塚出土土器の内容と糠塚貝塚出土土器の占める位置—」宮城教育大学歴史研究会 「仙台湾周辺の考古学的研究 (宮城県の地理と歴史 3)」 pp. 21-35

岩手県編 1961 「岩手県史 1 上古篇 上代篇」

興野義一 1967 「大木式土器理解のために (I)」『考古学ジャーナル』13 pp. 16-18

興野義一 1968a 「大木式土器理解のために (II)」『考古学ジャーナル』16 pp. 22-25

興野義一 1968b 「大木式土器理解のために (III)」『考古学ジャーナル』18 pp. 8-10

興野義一 1968c 「大木式土器理解のために (IV)」『考古学ジャーナル』24 pp. 17-19

興野義一 1969 「大木式土器理解のために (V)」『考古学ジャーナル』32 pp. 6-9

興野義一 1970a 「大木式土器理解のために (VI)」『考古学ジャーナル』48 pp. 20-22

興野義一 1970b 「大木 5b 式土器の提唱 —宮城県長者原遺跡出土資料による—」『古代文化』22-4 pp. 97-102

興野義一 1981 「糠塚貝塚について」『迫町史』 pp. 1105-1136

興野義一 1984 「大木式土器について」『宮城の研究 1 考古学篇』清文堂 pp. 173-190

興野義一 1996 「山内清男先生供与の大木式土器写真セットについて」『画龍点睛 山内清男先生没後 25 年記念論集』同論集刊行会 pp. 215-224

清野謙次 1925 「後志国余市の貝塚外四篇」『民族』1-1 pp. 161-166

清野謙次 1969 「日本貝塚の研究」岩波書店

佐原真 1981 「縄文施文法入門」『縄文土器大成 3 後期』講談社 pp. 162-167

須藤隆 2003 「歴史資源としての考古学資料データベース化の研究」『『歴史資源』として捉える歴史資料の多角的研究』 pp. 74-80

須藤隆 2005 「『歴史資源アーカイブ』による考古学陳列館・標本室収蔵の考古学資料データベース化」『東北大学歴史資源アーカイブの構築と社会的メディア化』 pp. 119-122

西川博孝 1983 「竹管文」『縄文文化の研究 5 縄文土器 III』雄山閣 pp. 219-235

長谷部言人 1919a 「石器時代遺跡に於る糞石」『人類学雑誌』34-11・12 pp. 394-396

長谷部言人 1919b 「宮戸島里浜貝塚の土器に就て」『現代之科学』7-3 pp. 37-46

原信之・馬目順一 1968 「宮城県大木田貝塚発見の遺物について」『古代』51 pp. 31-42

福田友之 1973 「史跡「大木田貝塚」環境整備調査報告書 I (七ヶ浜町文化財調査報告書第 1 集)」七ヶ浜町教育委員会

藤沼邦彦 1969 「第 I トレンチと第 II トレンチ」『埋蔵文化財緊急発掘調査概報 —長根貝塚— (宮城県文化財調査報告書第 19 集)」宮城県教育委員会 pp. 3-25

松本彦七郎 1919a 「日本先史人類論」『歴史と地理』3-2 pp. 19-31

松本彦七郎 1919b 「宮戸島里浜及気仙郡瀬澤介塚の土器 附

特に土器紋様論 (一)」『現代之科学』7-5 pp. 10-42

松本彦七郎 1919c 「宮戸島里浜及気仙郡瀬澤介塚の土器 附特に土器紋様論 (二)」『現代之科学』7-6 pp. 20-48

松本彦七郎 1919d 「日本石器時代土器」『理学界』17-3 pp. 1-4

松本彦七郎 1919e 「日本の石器時代土器 (二)」『理学界』17-4 pp. 5-8

松本彦七郎 1929 「陸前国桃生郡小野村川下り響介塚調査報告」『東北帝国大学理学部地質学古生物学教室研究邦文報告』7 pp. 1-65

松本彦七郎 1930a 「陸前国桃生郡小野村川下り響介塚調査報告附図」『東北帝国大学理学部地質学古生物学教室研究邦文報告』8 第 1-10 版

松本彦七郎 1930b 「陸前国名取郡西多賀村の三石器時代乃至直後遺蹟」『考古学雑誌』20-2 pp. 1-17

松本彦七郎 1930c 「陸前国名取郡西多賀村の三石器時代乃至直後遺蹟 (二)」『考古学雑誌』20-4 pp. 21-35

八巻正文他 1974 「史跡「大木田貝塚」環境整備調査報告書 II (七ヶ浜町文化財調査報告書第 2 集)」七ヶ浜町教育委員会
八巻正文他 1978 「大木田貝塚 —昭和 49 年度環境整備調査報告 (七ヶ浜町文化財調査報告書第 3 集)」七ヶ浜町教育委員会

八巻正文他 1979 「大木田貝塚 —昭和 52 年度環境整備調査報告 (七ヶ浜町文化財調査報告書第 4 集)」七ヶ浜町教育委員会

八巻正文他 1980 「大木田貝塚 —昭和 53 年度環境整備調査報告 (七ヶ浜町文化財調査報告書第 5 集)」七ヶ浜町教育委員会

山内清男 1929a 「関東に於ける繊維土器」『史前学雑誌』1-2 pp. 1-30

山内清男 1929b 「繊維土器について 追加第一」『史前学雑誌』1-3 pp. 85-86

山内清男 1930 「斜行縄紋に関する二三の観察」『史前学雑誌』2-3 pp. 187-199

山内清男 1936 「日本考古学の秩序」『ミネルヴァ』1-4 pp. 1-10

山内清男 1937 「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』1-1 pp. 29-32

山内清男 1939-41 「日本先史土器図譜 (I~XII 集)」先史考古学会

山内清男 1961 「日本先史土器の縄紋」(1979 年刊行)

山内清男編 1964 「日本原始美術 1 縄文式土器」講談社
Suto, Takashi 2004 Yayoi Period Polished Stone Reaping Knives of Northeastern Japan : A Marker of Early Agricultural Economy, *Bulletin of the Tohoku University Museum*, No. 3, pp. 17-67

大木田貝塚調査関係文献目録

伊東信雄 1957 「古代史 第一章 縄文式文化時代」『宮城県史 1 (古代史・中世史)』財団法人宮城県史刊行会 pp. 3-51

伊東信雄 1973 「古代東北発掘」学生社

伊東信雄 1977 「山内博士東北縄文土器編年の成立過程」『考古学研究』24-3・4 pp. 164-170

伊東信雄 1981 「宮城県史 34 (資料篇 11 史料集 V 考古資料)」財団法人宮城県史刊行会

小笠原好彦 1968 「東北地方南部における前期末から中期初頭の縄文式土器 —昭和 38 年発掘宮城県大木田貝塚出土土器の内容と糠塚貝塚出土土器の占める位置—」宮城教育大学歴史研究会 「仙台湾周辺の考古学的研究 (宮城県の地理と歴史 3)」 pp. 21-35

岩手県編 1961 「岩手県史 1 上古篇 上代篇」

加藤孝 1960 「考古学上よりみた塩竈市周辺の遺跡」『塩竈市史 III 別冊 I』塩竈市

- 興野義一 1967 「大木式土器理解のために (I)」『考古学ジャーナル』13 pp. 16-18
- 興野義一 1968a 「大木式土器理解のために (II)」『考古学ジャーナル』16 pp. 22-25
- 興野義一 1968b 「大木式土器理解のために (III)」『考古学ジャーナル』18 pp. 8-10
- 興野義一 1968c 「大木式土器理解のために (IV)」『考古学ジャーナル』24 pp. 17-19
- 興野義一 1969 「大木式土器理解のために (V)」『考古学ジャーナル』32 pp. 6-9
- 興野義一 1970a 「大木式土器理解のために (VI)」『考古学ジャーナル』48 pp. 20-22
- 興野義一 1970b 「大木 5b 式土器の提唱 —宮城県長者原遺跡出土資料による—」『古代文化』22-4 pp. 97-102
- 興野義一 1981 「糠塚貝塚について」『迫町史』pp. 1105-1136
- 興野義一 1984 「大木式土器について」『宮城の研究 1 考古学篇』清文堂 pp. 173-190
- 興野義一 1996 「山内清男先生供与の大木式土器写真セットについて」『画龍点睛 山内清男先生没後 25 年記念論集』同論集刊行会 pp. 215-224
- 清野謙次 1925 「後志国余市の貝塚外四篇」『民族』1-1 pp. 161-166
- 清野謙次 1969 「日本貝塚の研究」岩波書店
- 斎藤忠 1927 「陸前国大木田貝塚に就いて」『中央史壇』13-3 pp. 104-108
- 七ヶ浜町誌編纂委員会 1967 「七ヶ浜町誌」七ヶ浜町役場
- 長谷部言人 1919a 「石器時代遺跡に於る糞石」『人類学雑誌』34-11・12 pp. 394-396
- 長谷部言人 1919b 「宮戸島里浜貝塚の土器に就て」『現代之科学』7-3 pp. 37-46
- 原信之・馬目順一 1968 「宮城県大木田貝塚発見の遺物について」『古代』51 pp. 31-42
- 福田友之 1973 「史跡「大木田貝塚」環境整備調査報告書 I (七ヶ浜町文化財調査報告書第 1 集)」七ヶ浜町教育委員会
- 藤沼邦彦他 1989 「宮城県の貝塚 (東北歴史資料館資料集 25)」東北歴史資料館
- 松本彦七郎 1919a 「日本先史人類論」『歴史と地理』3-2 pp. 19-31
- 松本彦七郎 1919b 「宮戸島里浜及気仙郡瀬澤介塚の土器 附特に土器紋様論 (一)」『現代之科学』7-5 pp. 10-42
- 松本彦七郎 1919c 「宮戸島里浜及気仙郡瀬澤介塚の土器 附特に土器紋様論 (二)」『現代之科学』7-6 pp. 20-48
- 松本彦七郎 1919d 「日本石器時代土器」『理学界』17-3 pp. 1-4
- 松本彦七郎 1919e 「日本の石器時代土器 (二)」『理学界』17-4 pp. 5-8
- 八巻正文他 1974 「史跡「大木田貝塚」環境整備調査報告書 II (七ヶ浜町文化財調査報告書第 2 集)」七ヶ浜町教育委員会
- 八巻正文他 1978 「大木田貝塚 —昭和 49 年度環境整備調査報告 (七ヶ浜町文化財調査報告書第 3 集)」七ヶ浜町教育委員会
- 八巻正文他 1979 「大木田貝塚 —昭和 52 年度環境整備調査報告 (七ヶ浜町文化財調査報告書第 4 集)」七ヶ浜町教育委員会
- 八巻正文他 1980 「大木田貝塚 —昭和 53 年度環境整備調査報告 (七ヶ浜町文化財調査報告書第 5 集)」七ヶ浜町教育委員会
- 山内清男 1929a 「関東に於ける繊維土器」『史前学雑誌』1-2 pp. 1-30
- 山内清男 1929b 「繊維土器について 追加第一」『史前学雑誌』1-3 pp. 85-86
- 山内清男 1930 「斜行縄紋に関する二三の観察」『史前学雑誌』2-3 pp. 187-199
- 山内清男 1936 「日本考古学の秩序」『ミネルヴァ』1-4 pp. 1-10
- 山内清男 1937 「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』1-1 pp. 29-32
- 山内清男 1939-41 「日本先史土器図譜 (I~XII 集)」先史考古学会
- 山内清男 1961 「日本先史土器の縄紋」(1979 年刊行)
- 山内清男編 1964 「日本原始美術 1 縄文式土器」講談社

第2表 山内清男大木式土器標識資料属性表 (1)
Table 2. Attribute list of the type artifacts of the Daigi types of the Jomon pottery selected by Dr. Sugao Yamanouchi (1)

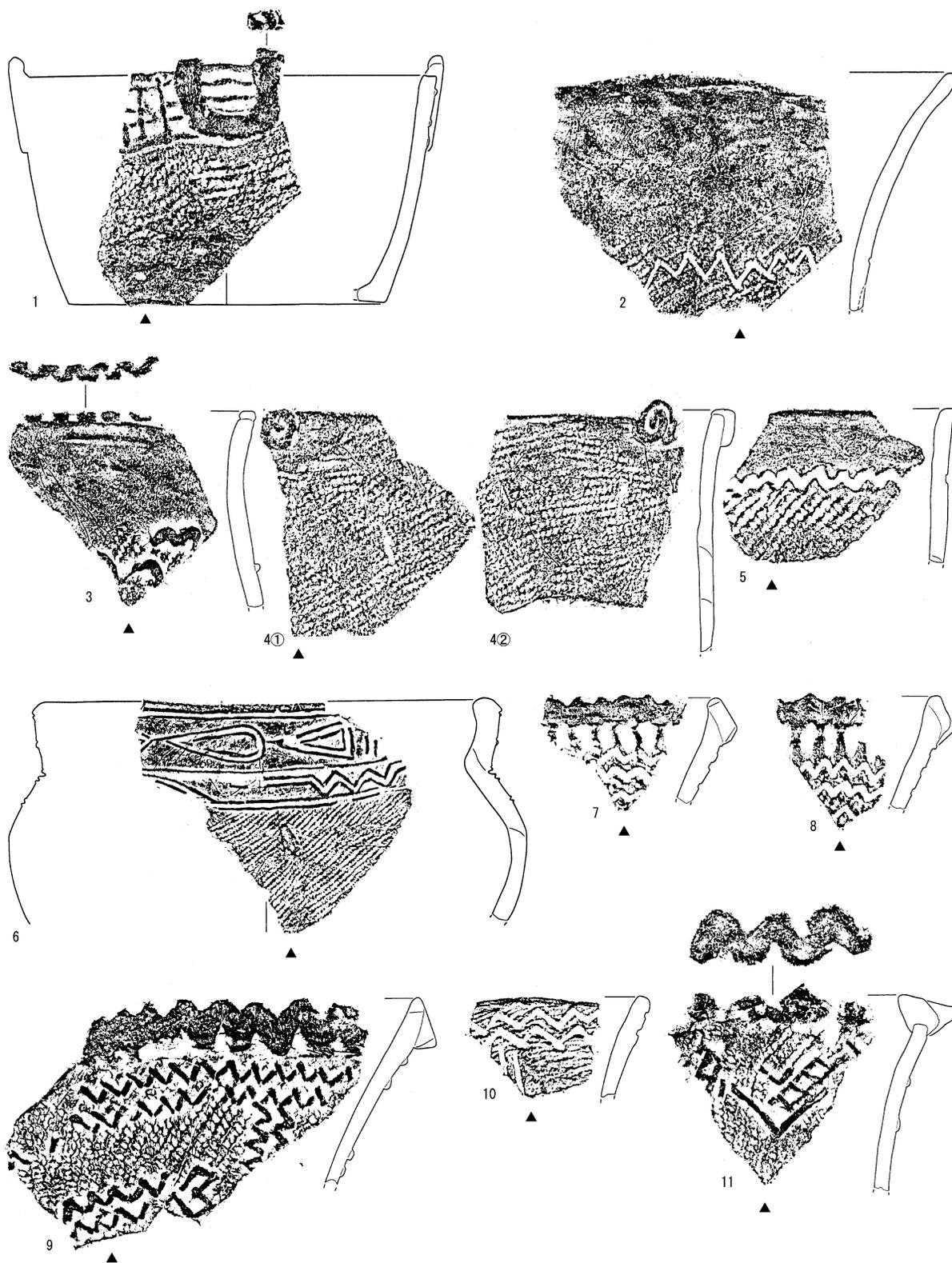
Table with 13 columns: No., 型式, 器種, 器形, 口縁の形状、調整、裝飾, 口縁部、頸部の裝飾、調整, 底部、底部の裝飾、調整, 施文具、施文手法, 施文原形、施文法, 内面調整, 胎土, 法量, ラベル, 備考. Rows 1-14 describe various pottery types (大木4式 to 大木6式) with detailed attributes.

第2表 山内清男大木式土器標識資料属性表 (2)
Table 2. Attribute list of the type artifacts of the Daigi types of Jomon pottery selected by Dr. Sugao Yamanouchi (2)

No.	型式	器種、器形	口縁部の形状、調整、裝飾	口縁部、頸部の裝飾、調整	体部、底部の裝飾、調整	施文具、施文手法	縄文原形、施文法	施文、調整手順	内面調整	胎土	法量	ラベル	備考
15	大木6式	深鉢、口縁部はわずかに外巻する(1類)。口縁部は径(くびれ)がゆるい(2類)。	大波状口縁。外面に肥厚した帯を形成する。帯は縦に絞られ、帯の間に丸みがある。	波状口縁にまつて口縁部に絞った帯と押引文が施される。頸部に絞文が施され、帯がゆるい。帯の間に丸みがある。	体部には絞文が施される。	先端の丸い幅7mm以下の工具による短波状文。幅2.5mmの多角竹管による押引文が施される。幅5~8mmの粘土紐が貼付され、先端の角張った幅2~3mmの工具で刻まれる。	斜線を伴うLR斜行縄文を横に回転させる。	縄文→貼付→刻み	なで→磨い磨き。口縁部は横。体部は横または斜め。	径1mm以下の石英、長石など砂粒を含む。	器厚9mm	-	補修孔あり。
16	大木6式	深鉢、口縁部はわずかに外巻する(2類)。	極めて緩やかな波状口縁。外面に肥厚する。帯は縦に絞られ、帯の間に丸みがある。	口縁部下部に貼付文がめくぐる。肥厚部には横波状文が施される。頸部には絞文が施され、帯の間に丸みがある。	体部には絞文が施され、半波状文の縦線が施される。	先端が角張った幅7~8mmの工具で短波状文が施される。幅8mmの粘土紐が貼付され、指頭で押引文が施される。幅6mmの半波状文による短波状文が施される。	LRを横に回転させる斜行縄文。	縄文→波状	丁寧な磨の跡。磨き(幅3~5mm)	径1mm以下の石英など砂粒を少量含む。	口径30.5cm 器厚10mm 1/8残存	①c	
17	大木7a式	深鉢、口縁部は直線的に立ち上がり、頸部は外巻する(2類)。口縁部は外面に張り出すように幅がつけられ、段を形成する(3類)。	突起を有する。端面はなでによって丸みを帯びる。端面は内面に縁を有する。	斜波状絞文、刺突を有する円形貼付が加えられる。	体部には絞文が施され、半波状文の縦線が施される。円形貼付が加えられる。	幅9mmの多角竹管を用いて押引文。波状文が施される。円形の粘土紐が貼付される。先端の丸い工具と幅7mmの半波状文を用いて刺突が加えられる。	LRを縦に回転させる斜行縄文。淡く不明瞭。	縄文→波状	横なで	径1mm以下の石英など砂粒を含む。	口径21.5cm 器厚7.5cm 1/4残存	①c ②[C7]	
18	大木7a式	深鉢、口縁部は直線的に立ち上がり、頸部は外巻する(3類)。	欠損により不明。	口縁部欠損。	体部下半には絞文が施された後、多角竹管の波状、押引文による方形断面の彫刻が施される。さらに滑巻文、縦線文が施される。	幅8mmの多角竹管を用いて波状文、押引文が施される。	LRを縦に回転させる斜行縄文。単色に淡く不明瞭。	縄文→波状	横なで→横の軽い磨き(幅2~4mm)	径1mm以下の石英など砂粒を含む。	体部径32.0cm 器厚9mm 1/8残存	①c ②[C]	
19	大木7a式	深鉢、口縁部が強くくびれ、外面に外巻する(2類)。口縁部は外面に張り出すように幅がつけられ、段を形成する(3類)。	なでによって丸みを帯びた端面に刻みが施され、小波状口縁となる。	短小波状絞文で、横なでが施される。	体部上半は無文で、横なでが施される。横波状押引文が施される。	幅2~3mmで先端の角張った工具を用い、刻みが施される。	なし	なで→刻み	横なで	石英、長石など砂粒を多量含む。径2~3mmの丸い粗もあ	口径34.0cm 器厚6mm 1/8残存	①c ②[C4]	
20	大木7a式	深鉢、口縁部がわずかに外巻する(1類)。	押圧で小波状となる。端面は外面に張り出すように丸みをつけられ、帯の間に丸みがある。	波状口縁。粗いので施される。	体部上半は無文。粗いので施される。波状口縁が施される。	先端の丸い工具で押引文が加えられる。	なし	なで→押引	横なで	径2mm以下の石英、長石など砂粒を多量含む。	器厚7.5mm	①a ②[C8]	接合痕が明瞭に残る。
21	大木7a式	深鉢、口縁部がわずかに外巻する(2類)。	平坦口縁。端面はなでによって丸みを帯びる。	口縁部に絞文が横に4列、間隔を開けて施される。	体部欠損。	-	LR斜行縄文を横に回転させる。	縄文	横なで	径2mm以下の石英、長石など砂粒を多量含む。	器厚7.5mm	①a ②[C2]	
22	大木7a式	深鉢、口縁部がわずかに外巻する(1類)。	平坦口縁。端面は外面に張り出すように丸みをつけられ、帯の間に丸みがある。	波状口縁の外面に張り出すように丸みをつけられ、帯の間に丸みがある。	体部下半は無文で、なでが施される。波状口縁が施される。	-	LRを横に回転させる斜行縄文。	縄文	なで→磨い磨き。口縁部は横。体部は斜め。	径1mm以下の石英など砂粒を含む。	口径18.0cm 器厚7mm 1/8残存	①a ②[C2]	接合痕が明瞭に残る。
23	大木7a式	深鉢、頸部で強くくびれ、外面に外巻する(2類)。	欠損により不明。	口縁部欠損。頸部には成形時に低い段が作られ、その上に横波状文がめくぐる。さらに貼付文が施される。絞文が横に施される。	体部には山形の貼付文が施され、その上周囲に斜行縄文が縦に施される。さらに貼付文が施される。	幅5~7mmの粘土紐が貼付され、断面形状は三角形もしくは頂部が丸みをもつ。	LRを横に回転させる斜行縄文。Lの結縄文は垂下文下に縦に回転させる。	貼付→斜行縄文→起部縄文	横なで→横の軽い磨き(幅2~4mm)	径1mm以下の石英など砂粒を含む。	器厚7.5mm	①a	
24	大木7b式	深鉢、口縁部が緩やかに内巻する(1類)。	大波状口縁。波頂部は平坦になる。帯の間に丸みがある。	口縁部外縁に粘土紐が貼付され、波頂部は平坦になる。帯の間に丸みがある。	体部欠損。	幅20mmの平坦な粘土紐が口縁部に貼付され、指頭で押引文が施される。	LRを横に回転させる斜行縄文。	貼付→縄文	横なで→磨い磨き。口縁部は横。体部は斜め。	径1mm以下の石英など砂粒を含む。	器厚10mm	①a ②[F4]	
25	大木7b式	深鉢、口縁部が緩やかに内巻する(1類)。	大波状口縁。波頂部は平坦になる。帯の間に丸みがある。	波頂部に横線1条が貼付され、指頭で押引文が施される。その下に波線3条が貼付される。波線が貼付される。波状口縁にまつて口縁部に絞文が施される。帯の間に丸みがある。	体部欠損。	幅8~11mmで断面三角形の粘土紐が貼付される。その上に指頭で押引文が施される。先端が平坦で断面が丸い幅3mmの工具による波状、刻み、刺突が施される。	LRを横に回転させる斜行縄文。	横波状貼付→押引文→波状	なで→磨い磨き	径1mm以下の石英、長石など砂粒を多量含む。	器厚9mm	①c ②[F4]	①c ②[F4]
26	大木7b式	深鉢、頸部で強くくびれ、外面に外巻する(2類)。	平坦口縁。波頂部は平坦になる。帯の間に丸みがある。	口縁部外縁に粘土紐が貼付され、波頂部は平坦になる。帯の間に丸みがある。	体部には絞文が施され、半波状文の縦線が施される。	幅5~10mmで断面三角形または丸い粘土紐が貼付される。幅8mmの多角竹管による波状文が施される。波状文が施される。	LRを横に回転させる斜行縄文。Lの結縄文は垂下文下に縦に回転させる。	貼付→縄文	横なで	径1mm以下の石英、長石など砂粒を多量含む。	口径31.5cm 器厚33.0cm 器厚6.5mm 1/8残存	①c	

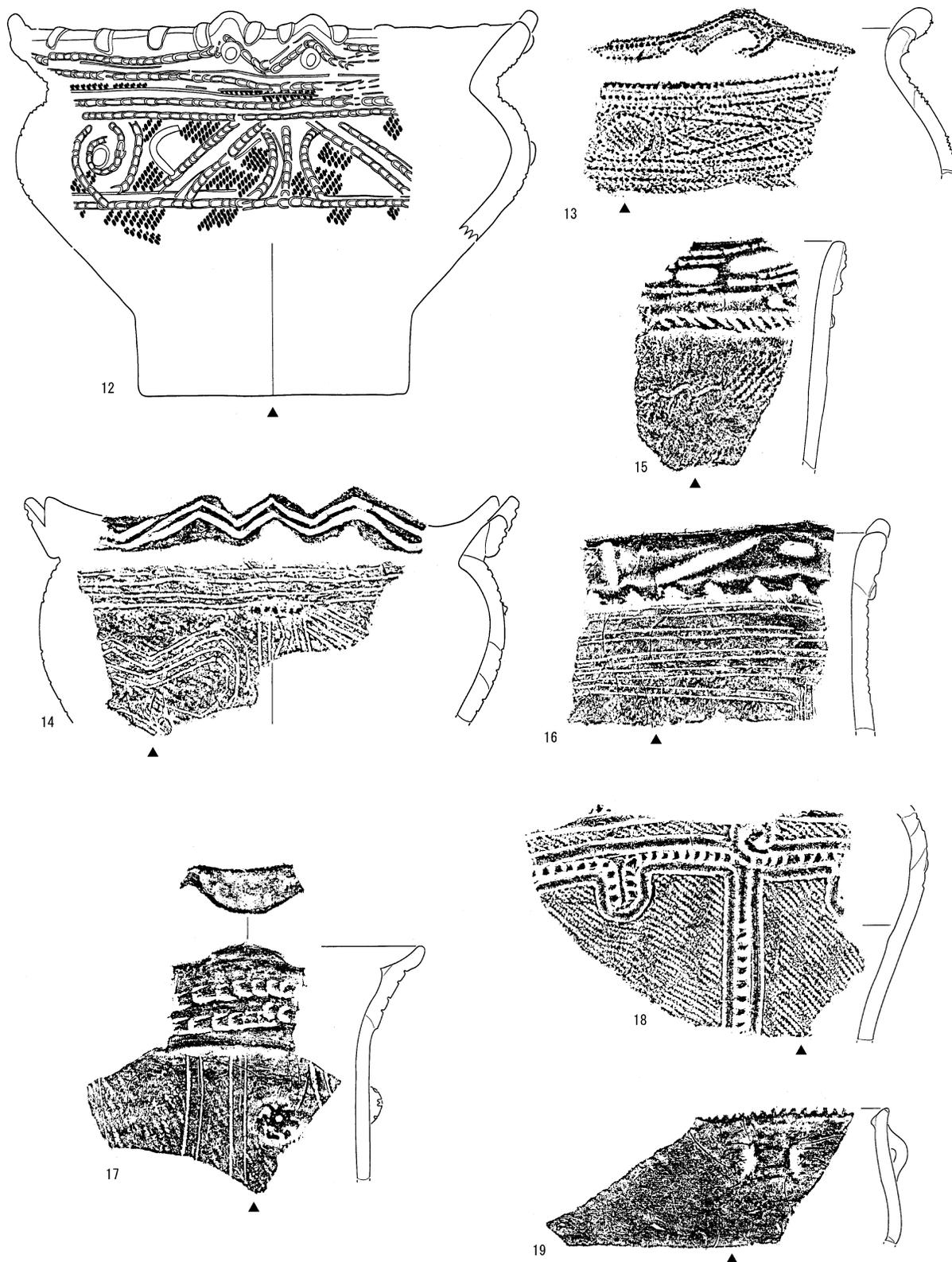
第2表 山内清男大木式土器標識資料属性表 (4)
Table 2. Attribute list of the type artifacts of the Daigi types of Jomon pottery selected by Dr. Sugao Yamanouchi (4)

No.	型式	器種・器形	口縁の形状・調整・裝飾	口縁部、頸部の裝飾、調整	肩部、頸部の裝飾、調整	胴部、底部の裝飾、調整	施文具、施文手法	施文原形、施文法	施文、調整手順	内面調整	胎土	法量	ラベル	備考
40	大木8a式	深鉢、胴部は軽く、ふくらみ、頸部は強く内側する。口縁部はわずかに内側して立ち上る(3類)。	平坦口縁。外縁は配付表面により肥厚する。端面は軽い磨きによって丸みを帯びる。	口縁部には小波状隆線文の深い文様帯となる。口縁部は2条の横線隆線文で覆われ、その間に小波状隆線文が施される。2条の区画隆線文を連結する横帯が配される。	口縁部には隆線による横線文が上部を囲い、頸部の下半分には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。	口縁部には横線文が施される。その後、横線隆線文が3条施され、これを上段として3条1組の沈折を付し、横線隆線文が順に展開する。	隆線は頂部がやや丸みを帯び、把手部は隆線が器面によく当てつけられるが、波状文はなでつけられ、丸い工具を用いて沈折文が施される。	LRを縦に回転させて斜行する斜行文。	押し、隆線→横文、沈折→横文、沈折	横なで→横の軽い磨き(幅3~7mm)	径1mm以下の石英、長石を多量に含む。	口径35.5cm 器厚10mm 1/4残存	①a	
41	大木8b式	深鉢、胴部は軽く、ふくらみ、頸部は強く内側する(1類)。	平坦口縁。端面は軽い磨きによって丸みを帯びる。	口縁部には隆線による横線文が上部を囲い、頸部の下半分には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。	口縁部には隆線による横線文が上部を囲い、頸部の下半分には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。	隆線は頂部がやや丸みを帯び、把手部は隆線が器面によく当てつけられるが、波状文はなでつけられ、丸い工具を用いて沈折文が施される。	RLを縦に回転させて斜行する斜行文。	横なで(幅7~8mm)→横の軽い磨き	横文、隆線	横なで(幅7~8mm)の軽い磨き	径1mm程度の石英を多量に含む。	口径29.5cm 器厚9.5mm 1/8残存	①c	
42	大木8b式	深鉢、胴部は強く内側する。口縁部は強く内側する。キャリパー形(1類)。	平坦口縁。端面は軽い磨きによって丸みを帯びる。	口縁部には隆線による横線文が上部を囲い、頸部の下半分には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。	口縁部には隆線による横線文が上部を囲い、頸部の下半分には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。	隆線は頂部がやや丸みを帯び、把手部は隆線が器面によく当てつけられるが、波状文はなでつけられ、丸い工具を用いて沈折文が施される。	RLを縦に回転させて斜行する斜行文。	横なで(幅3~5mm)→横の軽い磨き	隆線→沈折→調整	横なで(幅3~5mm)→横の軽い磨き	径1mm以下の石英など砂粒を含む。	口径17.0cm 器厚6mm 1/8残存	①c	
43	大木8b式	深鉢、胴部は軽く、ふくらみ、頸部は強く内側する。口縁部は強く内側する。キャリパー形(1類)。	波状口縁。端面は軽い磨きによって丸みを帯びる。	口縁部には隆線による横線文が上部を囲い、頸部の下半分には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。	口縁部には隆線による横線文が上部を囲い、頸部の下半分には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。	隆線は頂部がやや丸みを帯び、把手部は隆線が器面によく当てつけられるが、波状文はなでつけられ、丸い工具を用いて沈折文が施される。	LRを縦に回転させて斜行する斜行文。	横なで(幅2~9mm)→横の軽い磨き	横文→隆線→調整	横なで→横の軽い磨き	径1mm以下の石英など砂粒を含む。	口径15.0cm 器厚6mm 1/4残存	-	
44	大木8b式	深鉢、胴部は軽く、ふくらみ、頸部は強く内側する。口縁部は強く内側する。キャリパー形(1類)。	平坦口縁。端面は軽い磨きによって丸みを帯びる。	口縁部には隆線による横線文が上部を囲い、頸部の下半分には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。	口縁部には隆線による横線文が上部を囲い、頸部の下半分には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。	隆線は頂部がやや丸みを帯び、把手部は隆線が器面によく当てつけられるが、波状文はなでつけられ、丸い工具を用いて沈折文が施される。	LRを縦に回転させて斜行する斜行文。	横なで(幅2~9mm)→横の軽い磨き	隆線→沈折	横なで(幅2~9mm)→横の軽い磨き	径1mm以下の石英など砂粒を含む。	口径10.5cm 器厚6mm 1/8残存	①a ② [B6]	
45	大木8b式	深鉢、胴部は軽く、ふくらみ、頸部は強く内側する(2類)。	平坦口縁で貫通孔のある把手を有する。端面は軽い磨きによって丸みを帯びる。頸部には配付により肥厚する。	口縁部には隆線による横線文が上部を囲い、頸部の下半分には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。	口縁部には隆線による横線文が上部を囲い、頸部の下半分には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。	隆線は頂部がやや丸みを帯び、把手部は隆線が器面によく当てつけられるが、波状文はなでつけられ、丸い工具を用いて沈折文が施される。	RLを縦に回転させて斜行する斜行文。	横なで(幅5mm)→横の軽い磨き	隆線→沈折	横なで(幅5mm)→横の軽い磨き	径1mm以下の石英など砂粒を含む。	口径11.5cm 器厚4.5mm 1/2残存	①a ② [B7]	炭化物が多量に付着する。
46	大木8b式	深鉢、胴部は軽く、ふくらみ、頸部は強く内側する(2類)。	平坦口縁。端面は軽い磨きによって丸みを帯びる。	口縁部には隆線による横線文が上部を囲い、頸部の下半分には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。	口縁部には隆線による横線文が上部を囲い、頸部の下半分には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。	隆線は頂部がやや丸みを帯び、把手部は隆線が器面によく当てつけられるが、波状文はなでつけられ、丸い工具を用いて沈折文が施される。	LRを縦に回転させて斜行する斜行文。	横なで(幅3mm)→横の軽い磨き	横文→隆線→調整	口縁部下に凹線が1条のみ付着し、横なで→横の軽い磨き	径1mm以下の石英など砂粒を含む。	口径16.0cm 器厚6.5mm 1/8残存	①a ② [B6]	補修孔あり。
47	大木8b式	深鉢(1類)もしくは鉢、縁部が軽やかに内側する。	平坦口縁。端面は軽い磨きによって丸みを帯びる。	口縁部には隆線による横線文が上部を囲い、頸部の下半分には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。	口縁部には隆線による横線文が上部を囲い、頸部の下半分には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。	隆線は頂部がやや丸みを帯び、把手部は隆線が器面によく当てつけられるが、波状文はなでつけられ、丸い工具を用いて沈折文が施される。	なし	なし	隆線→沈折→調整	横の置磨き(幅3mm)に付着する。	径1mm以下の石英を多量に含む。	器厚8mm	② [B6]	
48	大木8b式	深鉢(1類)または鉢、頸部または胴部から口縁部にかけて軽やかに内側する。	大波状口縁。端面は配付により肥厚する。端面は軽い磨きにより丸みを帯び、明瞭に面を有する。	口縁部には隆線による横線文が上部を囲い、頸部の下半分には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。	口縁部には隆線による横線文が上部を囲い、頸部の下半分には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。	隆線は頂部がやや丸みを帯び、把手部は隆線が器面によく当てつけられるが、波状文はなでつけられ、丸い工具を用いて沈折文が施される。	なし	なし	隆線→沈折→調整	横の置磨き(幅3mm)に付着する。	径1mm以下の石英など砂粒を含む。	口径6mm	①a ② [B6]	
49	大木8b式	深鉢(2類)または鉢、頸部または胴部から口縁部にかけて軽やかに内側する。	大波状口縁。端面は配付により肥厚する。端面は軽い磨きにより丸みを帯び、明瞭に面を有する。	口縁部には隆線による横線文が上部を囲い、頸部の下半分には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。	口縁部には隆線による横線文が上部を囲い、頸部の下半分には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。	隆線は頂部がやや丸みを帯び、把手部は隆線が器面によく当てつけられるが、波状文はなでつけられ、丸い工具を用いて沈折文が施される。	なし	なし	隆線→沈折→調整	横の置磨き(幅3mm)に付着する。	径1mm以下の石英を多量に含む。	口径8.5mm	①a ② [B6]	
50	大木9式	深鉢、胴部は軽やかに外側して立ち上る。キャリパー形。胴部は軽く、ふくらみ(1類)。	波状口縁。端面は軽い磨きによって丸みを帯びる。配付により外面に肥厚する。	口縁部には隆線による横線文が上部を囲い、頸部の下半分には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。	口縁部には隆線による横線文が上部を囲い、頸部の下半分には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。	隆線は頂部がやや丸みを帯び、把手部は隆線が器面によく当てつけられるが、波状文はなでつけられ、丸い工具を用いて沈折文が施される。	RLを縦に回転させて斜行する斜行文。	RLを縦に回転させて斜行する斜行文。	横文→隆線→調整	横の置磨き(幅3~5mm)	径1mm以下の石英など砂粒を少量含む。	口径25.0cm 器厚6mm 1/4残存	①c ② [B6]	
51	大木9式	深鉢、口縁部が軽やかに外側して広がる(2類)。	波状口縁。端面は軽い磨きによって丸みを帯びる。配付により外面に肥厚する。	口縁部には隆線による横線文が上部を囲い、頸部の下半分には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。	口縁部には隆線による横線文が上部を囲い、頸部の下半分には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。	隆線は頂部がやや丸みを帯び、把手部は隆線が器面によく当てつけられるが、波状文はなでつけられ、丸い工具を用いて沈折文が施される。	RLを縦に回転させて斜行する斜行文。	RLを縦に回転させて斜行する斜行文。	横文→隆線→調整	横の置磨き(幅2~3mm)	径1mm以下の石英を多量に含む。	口径7mm	①a ② [B6]	
52	大木9式	深鉢、胴部は軽やかに外側して広がる(2類)。	波状口縁。端面は軽い磨きによって丸みを帯びる。配付により外面に肥厚する。	口縁部には隆線による横線文が上部を囲い、頸部の下半分には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。	口縁部には隆線による横線文が上部を囲い、頸部の下半分には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。頸部には横線文が順に展開する。	隆線は頂部がやや丸みを帯び、把手部は隆線が器面によく当てつけられるが、波状文はなでつけられ、丸い工具を用いて沈折文が施される。	RLを縦に回転させて斜行する斜行文。	RLを縦に回転させて斜行する斜行文。	横文→隆線→調整	横の置磨き(幅2~3mm)	径1mm以下の石英を多量に含む。	口径5mm	①a ② [B6]	



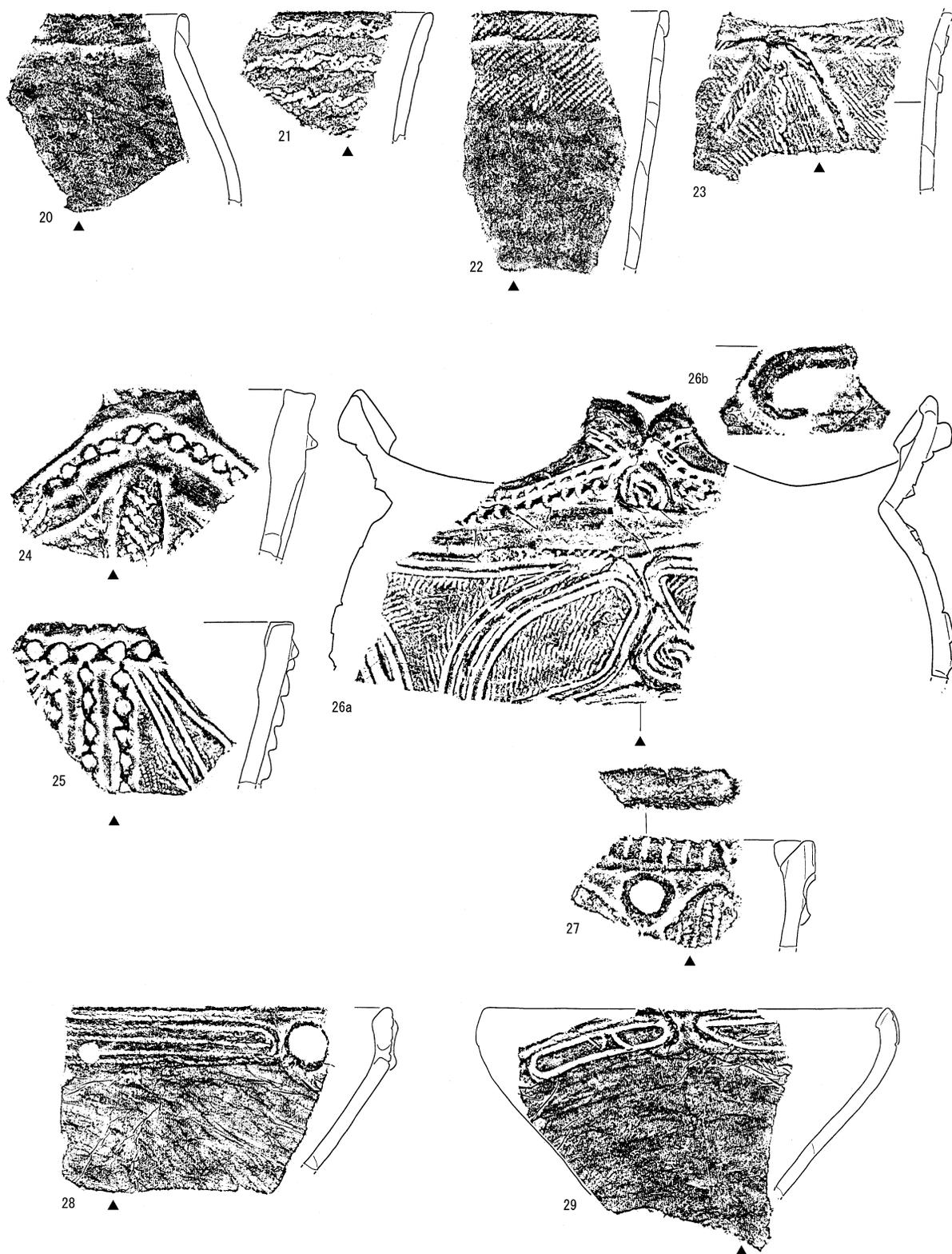
第3図 山内清男大木式土器標識資料実測図・拓影 (Scale=1:3) ▲は断面実測の位置を表す
 1~5 大木4式土器, 6~11 大木5式土器

Figure 3. Type artifacts of the Daigi types of Jomon pottery selected by Dr. Sugao Yamanouchi



第4図 山内清男大木式土器標識資料実測図・拓影 (Scale=1:3)
 12~16 大木6式土器, 17~19 大木7a式土器

Figure 4. Type artifacts of the Daigi types of Jomon pottery selected by Dr. Sugao Yamanouchi



第 5 図 山内清男大木式土器標識資料実測図・拓影 (Scale=1:3)

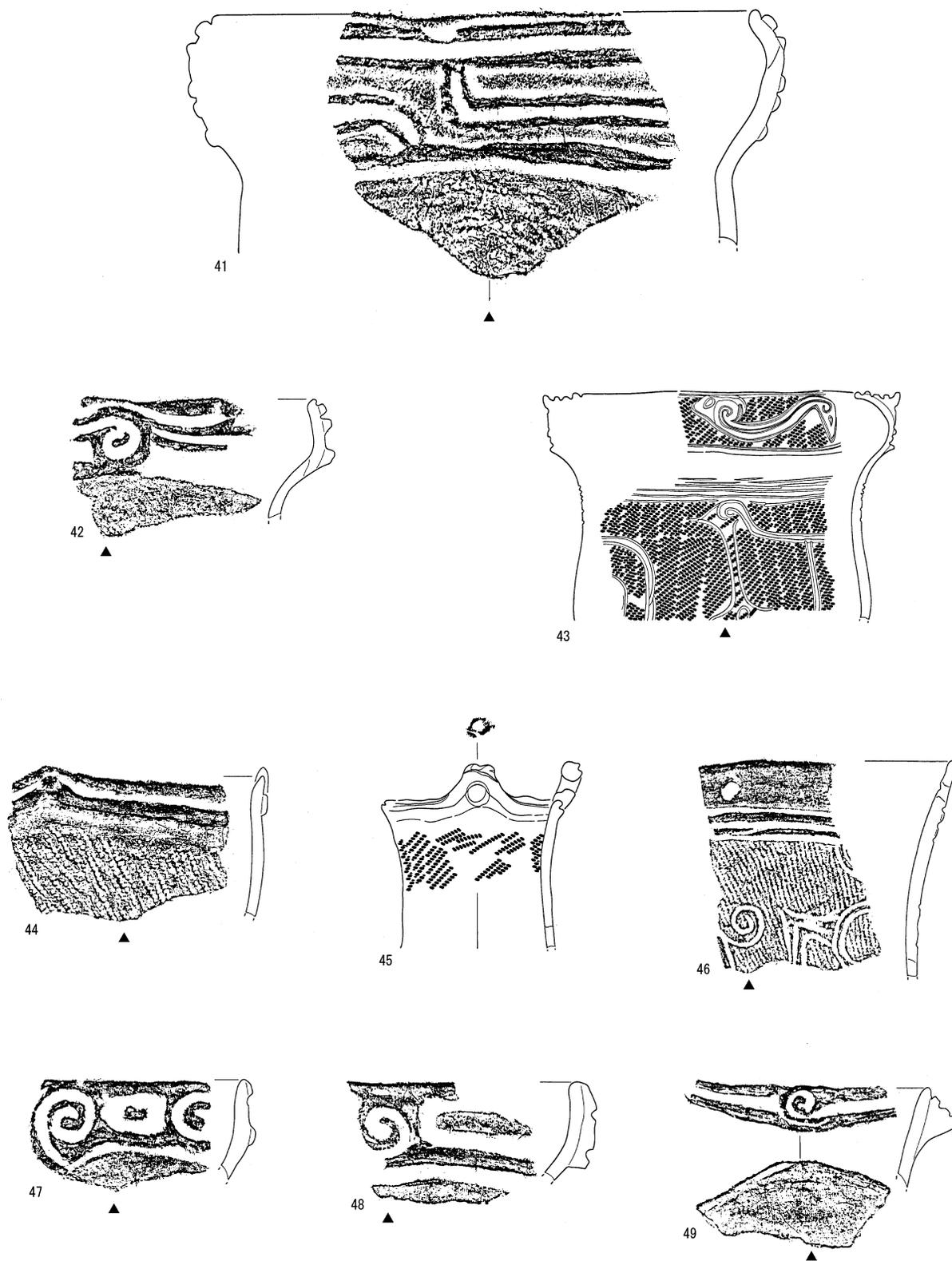
20~23 大木 7a 式土器, 24~29 大木 7b 式土器

Figure 5. Type artifacts of the Daigi types of Jomon pottery selected by Dr. Sugao Yamanouchi



第6図 山内清男大木式土器標識資料実測図・拓影 (Scale=1:3)
 30~40 大木8a式土器

Figure 6. Type artifacts of the Daigi types of Jomon pottery selected by Dr. Sugao Yamanouchi



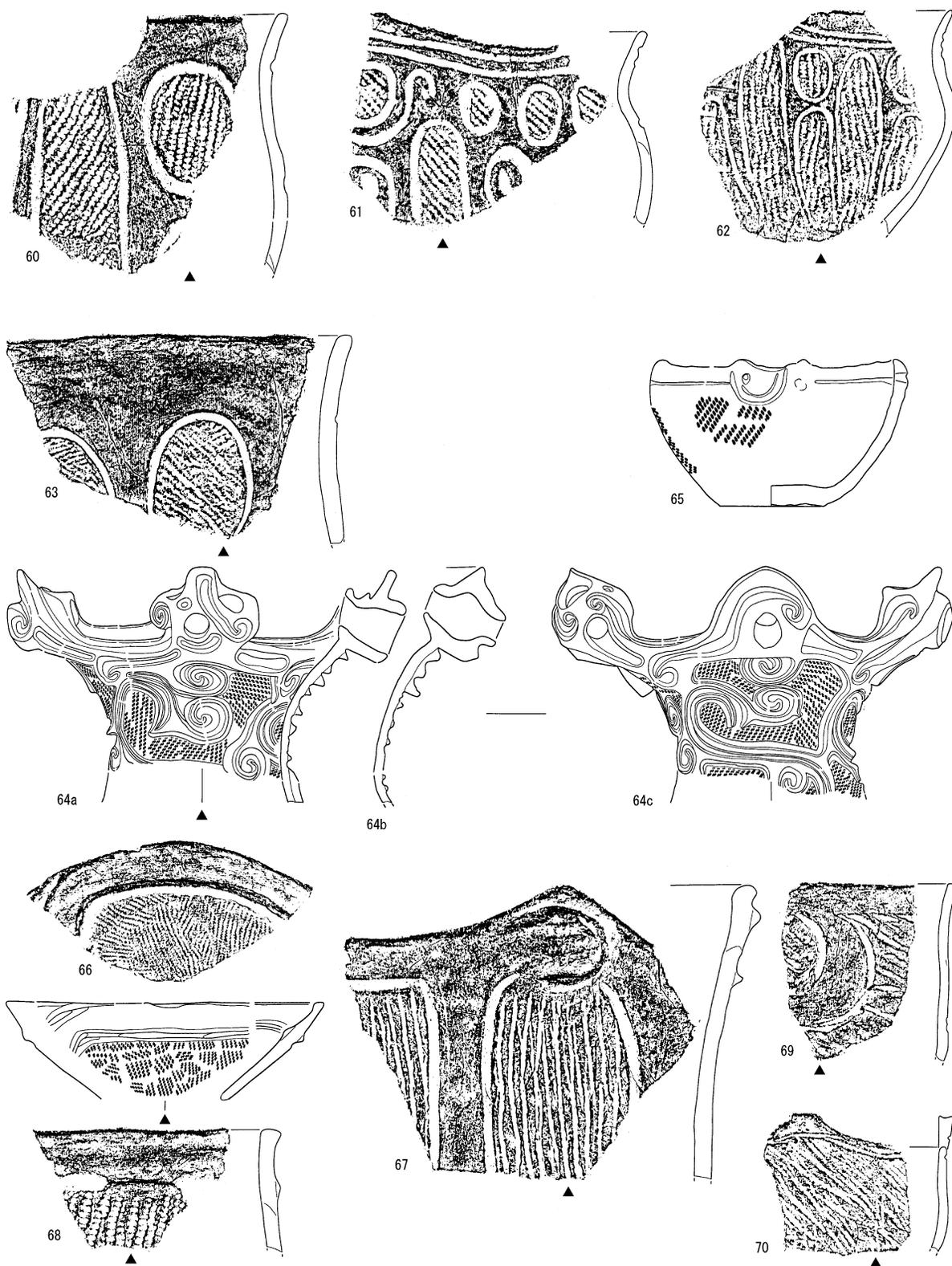
第7図 山内清男大木式土器標識資料実測図・拓影 (Scale=1:3)
41~49 大木8b式土器

Figure 7. Type artifacts of the Daigi types of Jomon pottery selected by Dr. Sugao Yamanouchi



第 8 図 山内清男大木式土器標識資料実測図・拓影 (Scale=1:3)
 50~59 大木 9 式土器

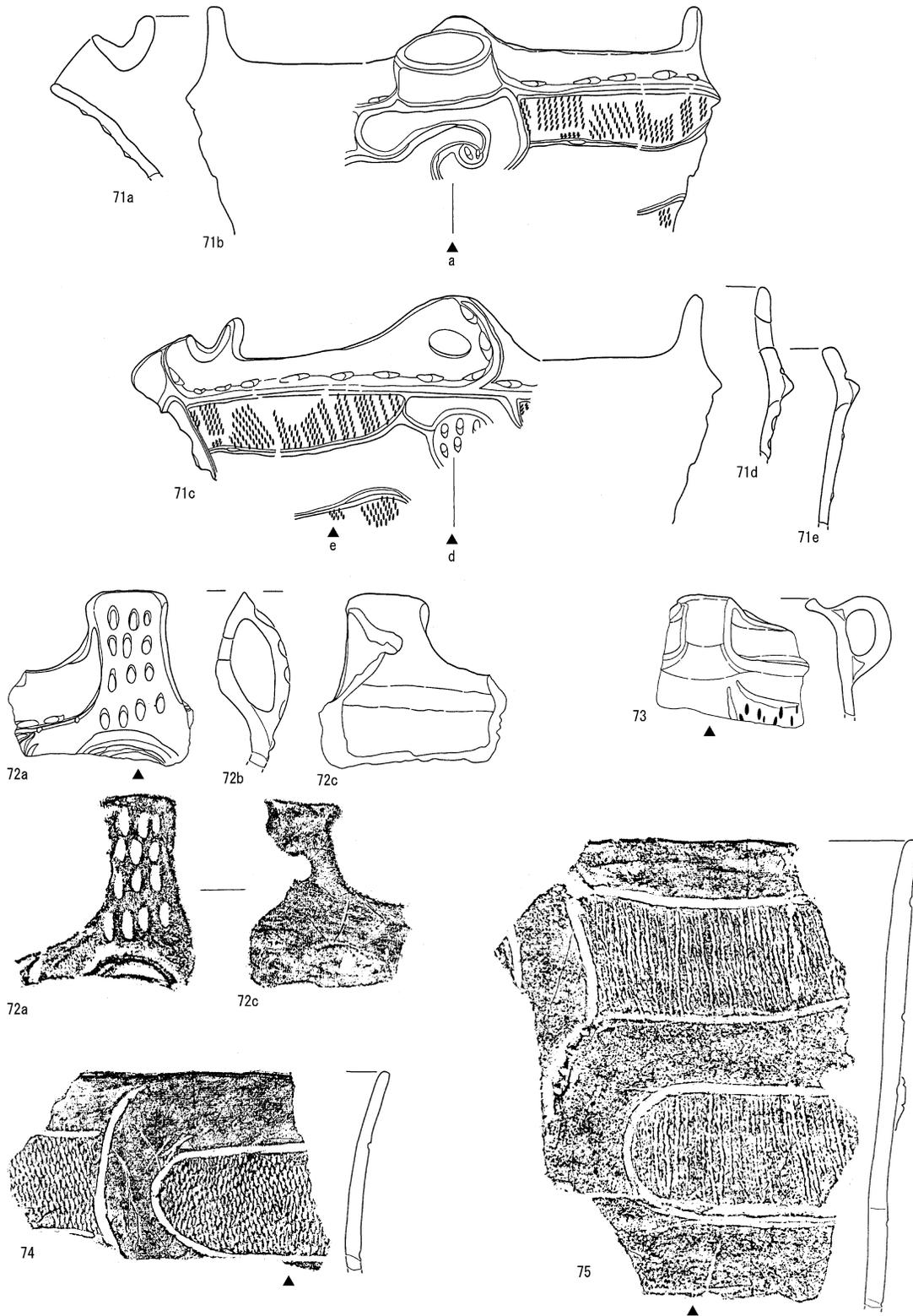
Figure 8. Type artifacts of the Daigi types of Jomon pottery selected by Dr. Sugao Yamanouchi



第9図 山内清男大木式土器標識資料実測図・拓影 (Scale=1:3)

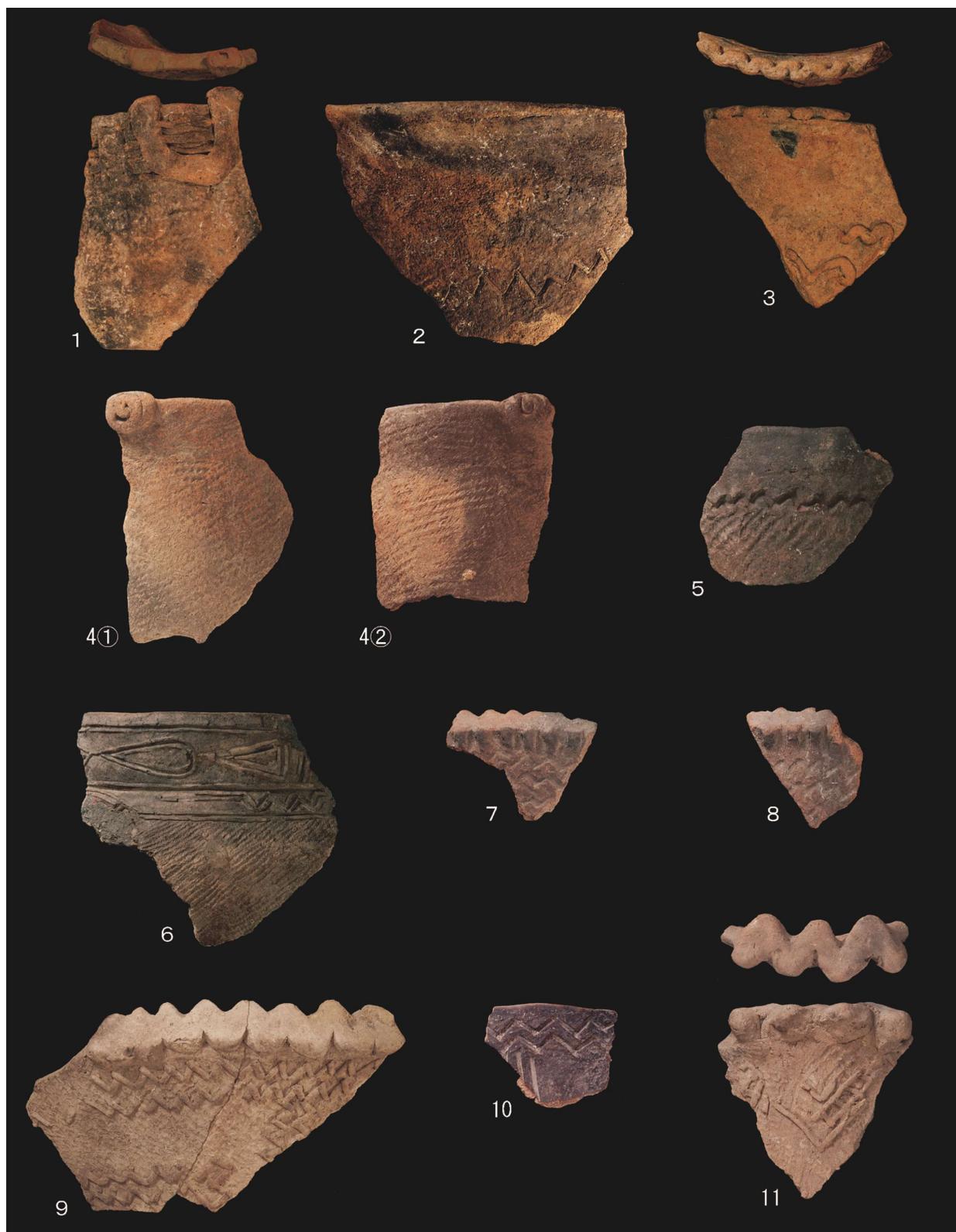
60~64 大木9式土器, 65~70 大木10式土器

Figure 9. Type artifacts of the Daigi types of Jomon pottery selected by Dr. Sugao Yamanouchi



第10図 山内清男大木式土器標識資料実測図・拓影 (Scale=1:3)
71~75 大木10式土器

Figure 10. Type artifacts of the Daigi types of Jomon pottery selected by Dr. Sugao Yamanouchi



写真図版1 山内清男大木式土器標識資料 (Scale=1:3)

1~5 大木4式土器, 6~11 大木5式土器

Plate 1. Type artifacts of the Daigi types of Jomon pottery selected by Dr. Sugao Yamanouchi



写真図版2 山内清男大木式土器標識資料 (Scale=1:3)

12~16 大木6式土器, 17~19 大木7a式土器

Plate 2. Type artifacts of the Daigi types of Jomon pottery selected by Dr. Sugao Yamanouchi



写真図版3 山内清男大木式土器標識資料 (Scale=1:3)

20~23 大木 7a 式土器, 24~29 大木 7b 式土器, 30~35 大木 8a 式土器

Plate 3. Type artifacts of the Daigi types of Jomon pottery selected by Dr. Sugao Yamanouchi



写真図版4 山内清男大木式土器標識資料 (Scale=1:3)

36~40 大木8a式土器, 41~49 大木8b式土器

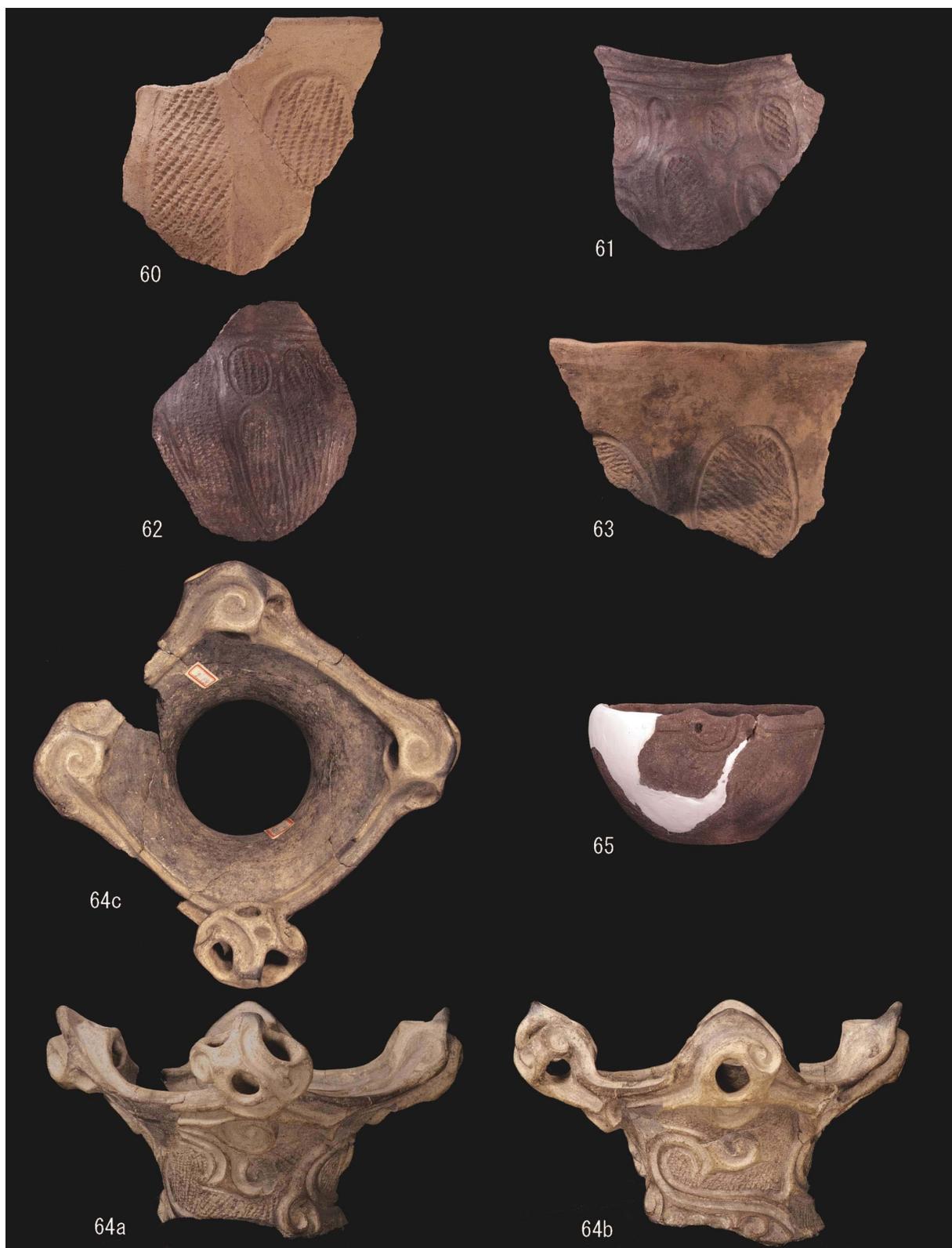
Plate 4. Type artifacts of the Daigi types of Jomon pottery selected by Dr. Sugao Yamanouchi



写真図版5 山内清男大木式土器標識資料 (Scale=1:3)

50~59 大木9式土器

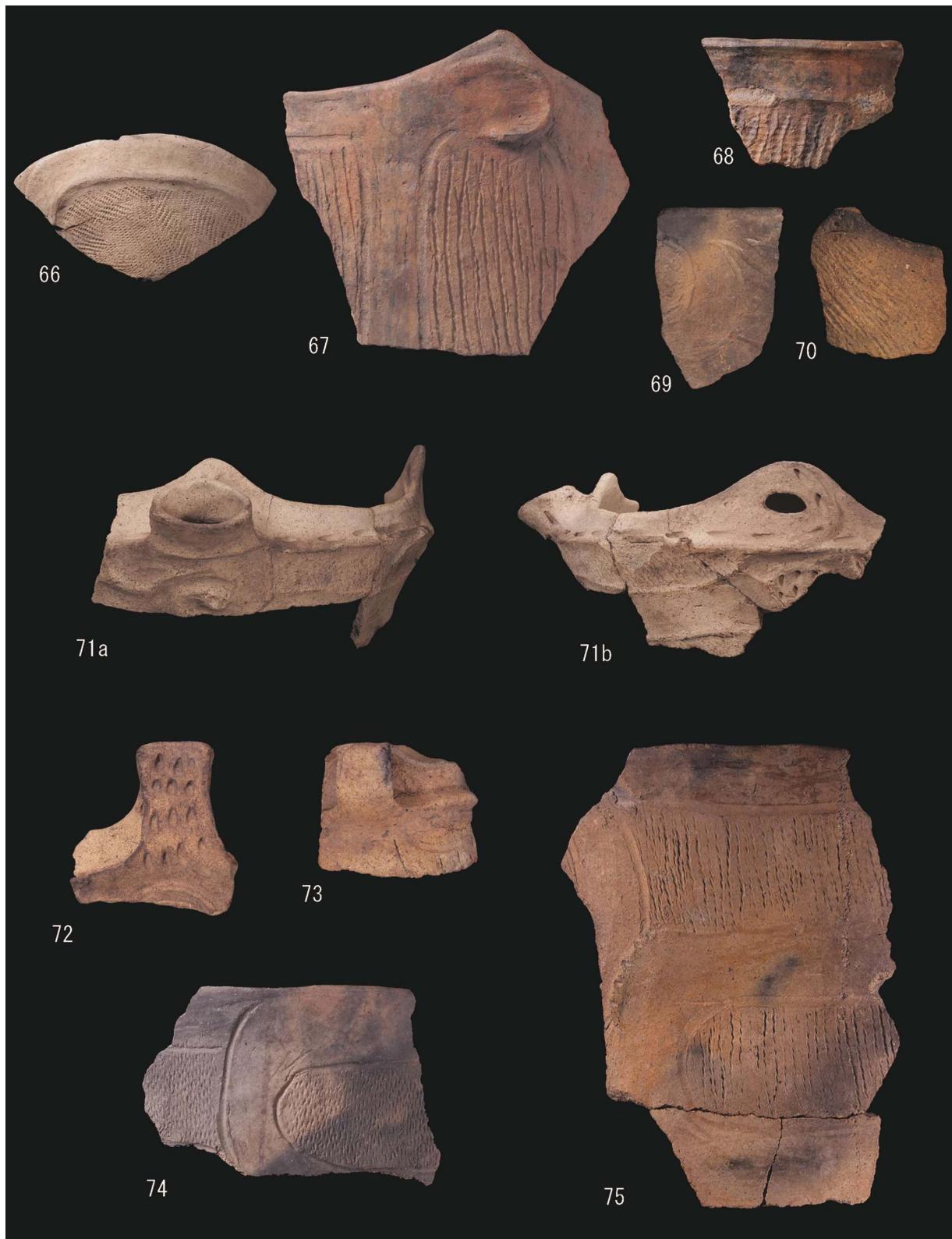
Plate 5. Type artifacts of the Daigi types of Jomon pottery selected by Dr. Sugao Yamanouchi



写真図版 6 山内清男大木式土器標識資料 (Scale=1:3)

60~64 大木 9 式土器, 65 大木 10 式土器

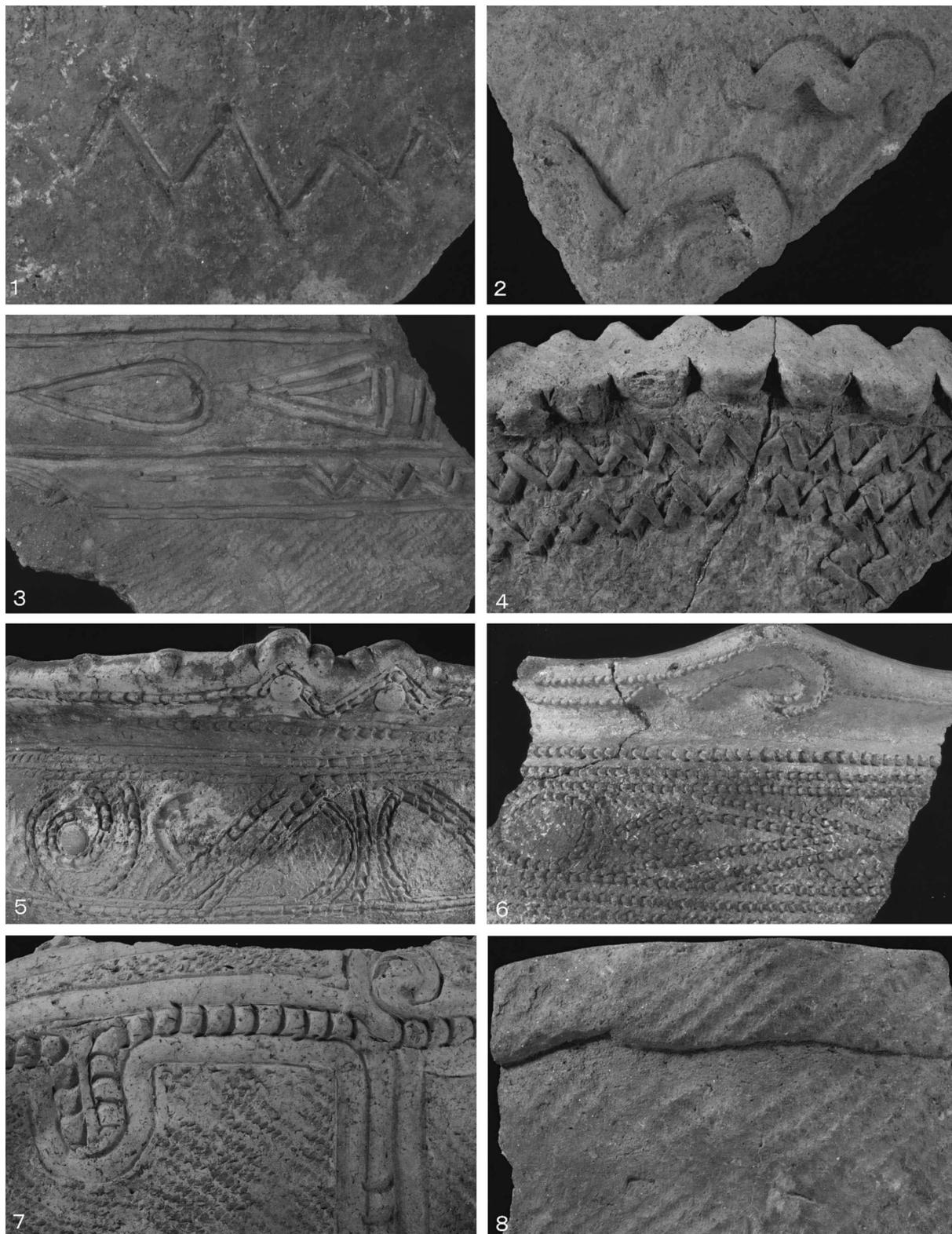
Plate 6. Type artifacts of the Daigi types of Jomon pottery selected by Dr. Sugao Yamanouchi



写真図版7 山内清男大木式土器標識資料 (Scale=1:3)

66~75 大木10式土器

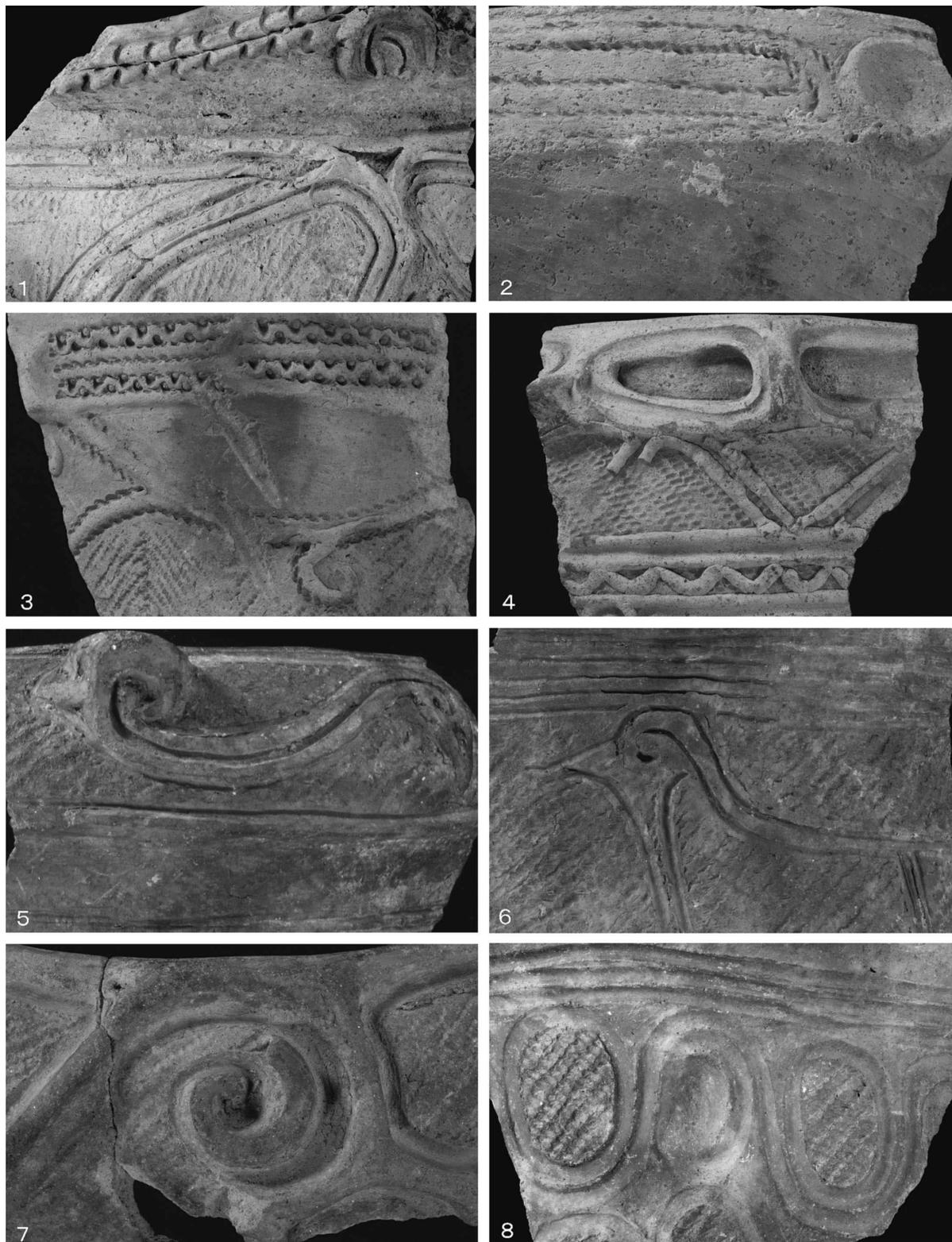
Plate 7. Type artifacts of the Daigi types of Jomon pottery selected by Dr. Sugao Yamanouchi



写真図版 8 山内清男大木式土器標識資料細部

1. 大木 4 式 (資料 2) 2. 大木 4 式 (資料 3) 3. 大木 5 式 (資料 6) 4. 大木 5 式 (資料 9) 5. 大木 6 式 (資料 12) 6. 大木 6 式 (資料 13) 7. 大木 7a 式 (資料 18) 8. 大木 7a 式 (資料 22)

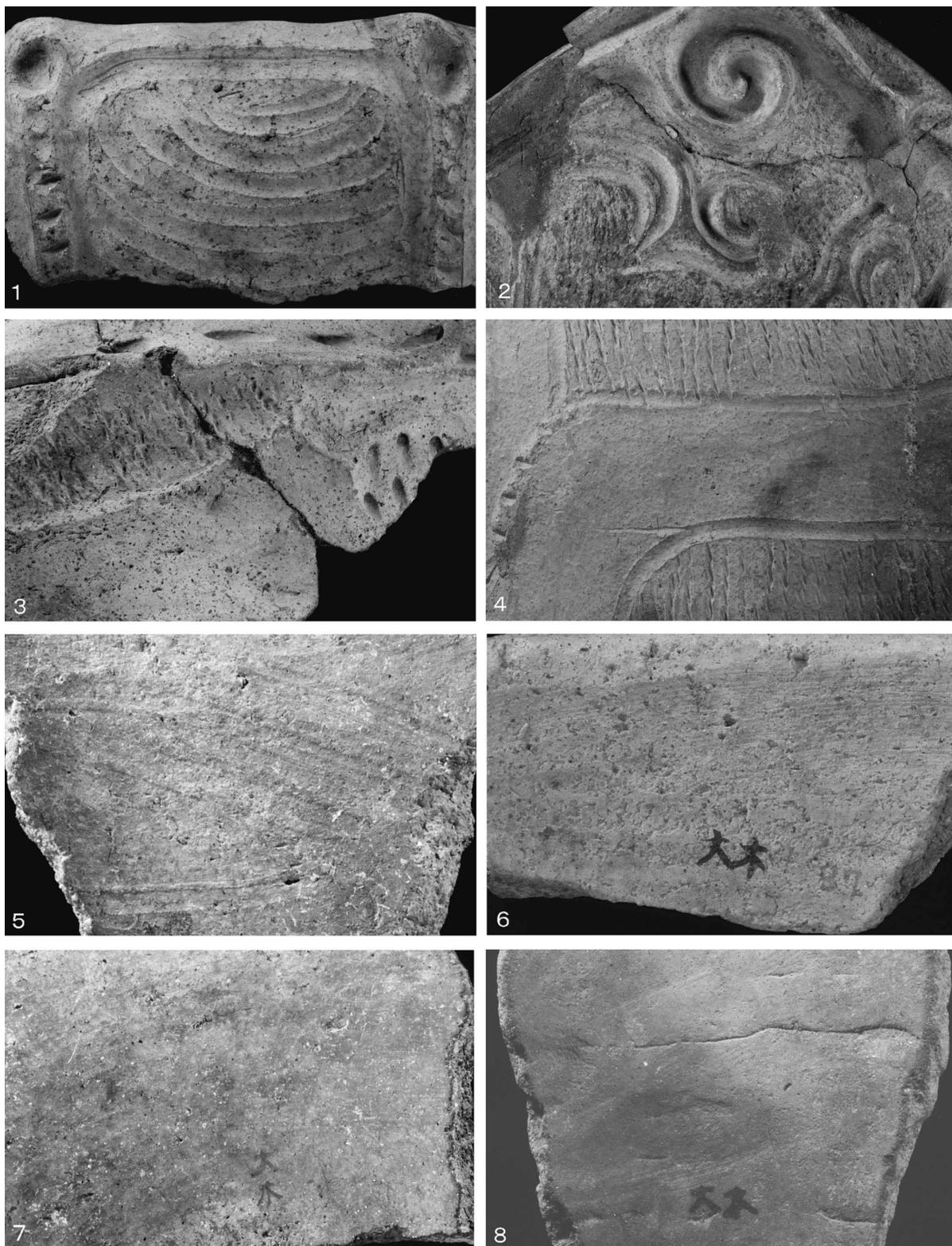
Plate 8. Details of type artifacts of the Daigi types of Jomon pottery selected by Dr. Sugao Yamanouchi



写真図版9 山内清男大木式土器標識資料細部

1. 大木 7b 式 (資料 26) 2. 大木 7b 式 (資料 28) 3. 大木 8a 式 (資料 35) 4. 大木 8a 式 (資料 36) 5. 大木 8b 式 (資料 43 口縁部) 6. 大木 8b 式 (資料 43 体部) 7. 大木 9 式 (資料 53) 8. 大木 9 式 (資料 57)

Plate 9. Details of type artifacts of the Daigi types of Jomon pottery selected by Dr. Sugao Yamanouchi



写真図版 10 山内清男大木式土器標識資料細部

1. 大木 9 式 (資料 58) 2. 大木 9 式 (資料 64) 3. 大木 10 式 (資料 71) 4. 大木 10 式 (資料 75) 5. 条痕 (資料 11) 6. なで→軽い磨き (資料 31) 7. 磨き (資料 51) 8. 接合痕 (資料 22)

Plate 10. Details of type artifacts of the Daigi types of Jomon pottery selected by Dr. Sugao Yamanouchi